

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
 昭和四十四年十二月十五日 印刷
 昭和四十五年一月一日発行 (毎月一日発行)
 (第五十二号)



No. 52

川柳 ゆーもあ 特集

一月号



酒 清
日本盛
ニホンサカリ

灘
西宮酒造 醸

超特撰
(化粧ケース入)
一、ハリットル詰・一、四一〇円



えらばれ
みがきぬかれた 灘の酒
超特撰 日本盛



料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 **蓬策** 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー



建長寺内の「咳一つきこえぬ中を天皇旗、
剣花坊氏の句碑と筆者。

建 長 寺 詣 り

中 島 生 々 庵

東京で甥の結婚式に参列するため式の前二日程余裕を作つて老妻を伴ひ11月13日鎌倉に向つた。一日は旧友と久瀬をあたため、一日は諸社寺の巡礼行をやつた。長らく念願して果せなかつた建長寺境内剣花坊句碑拝観も主な目的の一つ。昔はよく掃除がゆきとどき綺麗に片づいている事を建長寺のようだと言つたそうで、料理人建長寺だと鍋を見せの句さえある位だのになんとさして混雜もないのに意外な建長寺風景。その上拝観券売場の老人が句碑の場所を知らぬのには驚きであつた。

心ある柳人が訪ねて来るのも少くないと思つてきびしく注意しておいた。「咳一つきこえぬ中を天皇旗」と刻まれた大きな自然石は薄苔に覆われ僅かにそれを読みとれる。昭和9年9月11日長逝された師を生前に知るよしもない私だが親の墓にでも詣つた感銘をうけ暫らく去り難い思いであつた。二日後には総理が羽田を立つという騒然たる東京に長居は無要と16日昼過ぎ新幹線に飛び乗つて帰阪した。

名曲に音痴もうなる撥さばき

着くずれの妻へ年賀の客終る

屠蘇の酔うれしく戌の年男

正月は易者も芽出度う納めたり

おだてられながらも若さを崩すまじ

川柳塔一月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

建長寺詣り―句帖……………中島生々庵…(1)

川柳塔…(同人作品)……………中島生々庵選…(4)

ピンチヒッター……………不二田 一三夫…(2)

川傍柳初篇研究……………(七十九)……………(24)

前田喜代人・岡崎 重義・清 博美・藤井 和雄
川端 柳風・故高須亜三味・丸 十府・岡田 甫

新春雑話……………中島生々庵…(22)

近作柳樽……………菊沢小松園選…(36)

いぬどしだんぎ……………東野大八…(48)

秀句鑑賞……………清水白柳…(46)

―ゆーもあ特集―

ユーモアについて……………北川 春 巢…(26)

ピンチ

ヒッター

不二田 一三夫

「私論・柳論」を川村好郎氏に
お願いしておいたところ、十二月
四日の理事会の席上で「新年号か
ら新趣向のものにしてはどうか」
と、いうことだった。急のことで
メイ案も浮かばず、高速道路の真
ん中で立ち往生よろしく、進むこ
とも退くこともできない有様だっ
たが、白柳氏のいぬどし生まれの
柳人を調べた原稿を思いだし、
「よし、これでいこう」と、心
にきめたものだった。ところが、
東野大八氏の「いぬどしだんぎ」
を組んでみて、ネタは白柳氏提供
のものということがわかった。あ

梅志・薫風・形水・久米雄・春日・明朗・杜的・清子・白柳・一栄・恵二朗・甲吉・酔夢・求芽・千翁・あいき・阿茶・文秋・霊眼子・一保・静水・いわを・弘生・素身郎・水客・千梢・静馬・不水・初甫・静歩・金三・茂美・不酔・水車・丁路・柳慶・奈良子・肖二・綾女・柳子・旅風・どんたく・柳志・滋雀・独仙・八郎・由多香・弘美・弘朗・庸佑・一声・美代・布堂・鉄舟・善居・敬一・葵水・新之助・天笑・つき子・一二三・一三夫（到着順）

川柳塔社同人名簿……………（50）

初步教室……………本田恵二朗……………（54）

大萬川柳「斜め」……………清水白柳選……………（56）

★柳界展望……………（薫風）……………（58）

★本社十二月句会……………（庸佑）……………（68）

★各地柳壇……………（文秋）……………（72）

「暖房」……………西垣錦風選……………（52）

一路集「かるた」……………池田あや子選……………（52）

「警察犬」……………不二田一三夫選……………（53）

★編集集後記……………（一三夫）……………（74）

す、印刷所へ原稿を入れるドタン場のことであり、もうどなたにもお願いすることができなくなつた。

「一路集」の「警察犬」は田垣方大氏のご病気で代選と、本号ではピンチヒッターがダブってやってきました。

漫才台本に「猫舌の犬。―獅子鼻の犬。―猪首の犬。―鳥目の犬―馬づらの犬。ETC……………題が「わんわん物語」というので犬にひっかかるモノをならべたてた。「ほほう、犬のくせにネコ舌か」というようなシロモノだ。

課題吟が「タバコ」なら、ライター、マッチ、灰皿、肺ガンなど知っているものをナラべてから作句しているので、そんなクセが台本にも出るのであろう。



中島生々庵選

大阪市 金井文秋

飽き性の人へ抵抗小鳥の死

コンピューター手ごろのなない答出し

好きな柿だけは自分でむいて食べ

五人目の孫誕生

一億の中へ雄々しく呱呱の声

祖父の目にこいつなかなか男前

倉敷市 本田恵二朗

ある時は天使に化けてくれる妻

年輪のいびつなところにある値打ち

家風とは別に私室にあるムード

わが腰と相談してみても溝をとび

飼犬の尻尾上手に使い分け

大阪市 西出一栄

柿みかんせめて余生の贅に積み

切り花でよしふくいくと床に菊

お値段の手頃な品は気に召さず

人生の余白へ残すものが欲し

箒の先をからかうように冬の風

奈良県 草深醉升

ふるさとの雨に遇うさえ懐しく

晩酌はかかさず昼はくすりのみ

手のとどくところに孫の手置いて寝る

無事だった子へ大声で叱りつけ

わか死にの父にはすまぬほどに生き

大阪市 正本水客

瓜生石仏

道が吸いこまれる山の向うに陽が当る

奈落への細道のように岩ひらく
胸をつく石段苔の青せまる

あごなでて羅漢のひとつ語りかけ
いっぽんだけ紅葉し無住の寺荒れず

大阪市 大坂形水

ただ並ぶだけの舞台へ狩り出され
不景気向き商売もあり儲けてる

オーバーな話と知りつつ引き込まれ
何処さんも悩みごと持つものと知る
追い込みのハッパをかける十二月

富田林市 岩田美代

夕暮れて哀しき女傑米をとぐ
控え目にすれば失うものばかり

考えの甘さを笑う余地が
真実は高うつくので伏せておく
不覚にも初孫出来るを忘れとり

香川県 三井醉夢

見放されて息子退院

おめでたい退院でない寝返りよ
奇跡待つ退院の荷の重いこと
屋上で涙涸らして帰ります

泣き虫になるまい空の広いこと

慰めてくれた両眼見えぬ人

岡山県 浜田久米雄

還暦の十年先は考えず

男一匹還暦へまで辿り着き

秋の空男の浮気封じとき

秋晴れを百姓拝むように出る

楽隠居などとみんなにおだてられ

高槻市 山田季賛

出世出来ぬ身分だと上役からも言われ

今日も佳き日新幹線はよく稼ぎ

僕にまで合理化機械化押し寄せる

鍵穴を確かめて見る手暗り

早やがてんした自分がチトあわて

大阪市 木村水洞

停年へ無駄でなかったまわり道

春夏秋冬遊ぶにことかかぬ国

長屋とはかわりのない叙勲記事

天命と自覚してからよく眠れ

かけられた謎がとけないほどに呆け

倉敷市 水粉千翁

モーニング間に会いますて菊日和

たたずめば秋は落葉の中に昏れ

萩の扉を押せば余生の咳払い
日の陰をくれた落葉よ炊いてやろ
あきらめの顔ではなくて毛糸編む

竹原市 小島 蘭 幸

あした天気になあれ彼女から電話
君の欠点をひとつ見つけてはつとする
たまに逢えば時計ばかり見てる恋
好きだとは言わずリングを削いでくれ
君といった幸福君といった不幸

東大阪市 久米 奈良子

悔りを女の皮膚で感じとり
あだ花と知る人生の半すぎ
市場籠もてば私も女なり
名ばかりの門を構えて城とする
枯葉重なり合うて夢抱く

青森市 工藤 甲吉

仕事より先に労働歌を覚え
拳骨が泣くことばかり民主主義
君はフグ俺はクラゲでウマが合い
やけ酒を五臓六腑に嘆かれる
定年を遊び相手に孫が待ち

倉吉市 奥谷 弘朗

催促もせずに帰った重い足
退屈な割には頭のさえぬ日日
駅長も尻をおしてる満員車

一すじに一人を愛して満ちる日日
落ちつけばまだ残っていたチャンス

兵庫県 遠山 可住

米作りだけの父なり米つくる
遠足の子に済まないが慈雨となる
外国語みたいに万葉集暗記
借金が財産とは腑におちず
スト決行要求知らず馳せ参じ

出雲市 尼 緑之助

出雲の秋

田甫に墓石晚鐘もなく暮れる
夏も秋も神話の川は砂ばかり
兼業農白いい白い頬冠り

妻病む

突如として襲い妻中風という
亭主の座一段も二段も降りる

諫早市 川岡 靈眼子

唇を一つ与えて勝つ気なり
利子のつく金で華燭の式を挙げ

山登りするのにパーマ当てて出る
この俚で終る気はない鞭を当て
出漁へ妻が安堵の雲が晴れ

豊中市 戸田古方

教育功労賞授賞（一句）

来てみればあたり前とも思われず

大山蒜山行（四句）

田舎娘ですがとガイドの声きれい

秋がきて秋になつて秋の山

日の丸が素直お山の文化の日

よくみればポリエチレンの鳥おどし

高槻市 傍島静馬

静養という名で辞めるおえら方

ニューモードいつもの調子で歩かれず

いかしてるつもりステコサングラス

女房まだ上げそうにない煙草銭

首やると云うた子そこらにもうおらず

大阪市 本多柳志

賽銭の指へ我欲がからみつ

立ち退けばもうはすかいに道がつき

スモッグを吸いに都心へ行く定期

日照権もめて斜めに陽が当り

マイホーム主義にいつしか押し切られ

米子市 八木千代

汐時に妻の返事の調子よさ

誘惑を逃れた夜を少し悔い

慢性を断ち切るメスへ踏み切れず

誰からも好かれ出世に遠い椅子

悔いひとつ今日のページに閉じて寝る

大阪市 後藤梅志

塀ごしの陽ざしへ菊の二三輪

うら山を背負つて風景あやぶまれ

折れまがることをもっぱら心掛け

妻へ

おっとりとあれば無言のつよさしる

一びきの姿 緋鯉が生き残り

大阪市 橘高薫風

読み初めの今年は石田波郷集

菊花展天守へやさし菊の塀

菊の呼吸 処女懐胎もありぬべし

菊の壺薔薇の壺より物思

望郷よ地図の上では三廻

大阪市 不二田一三夫

死の五分前 そんな顔です執筆中

生きているこの栄光を 朝寝して
地下はスコップ 人間ほうり出され

寄 席

芸人の根性テレビでゆがめられ
テレビ禍を呪いテレビで家を建て

岡山県 池田古心

死票だとわかれど恩義の票を入れ
無理心中子会社此処も灯が消され
抵抗の諦めスッポンに似た手錠
豊作の隣りは被害調査標

愛媛県 村上旭童

生れたり死んだり今日はややこしい

早 抜

旱天へ雑草だけはちとめばえ
妻と子は肥えてそろそろ秋終る
金かけた順に盆栽かれていき

岡山県 直原七面山

孤独のリズムで落ちる雨垂れ
何かが一つ欠けている妻
身にも覚えがあつて笑えず
疑い解けて蘇える恋

大阪府 山川阿茶

斜線と斜線の交合からダイヤの光芒
気をつけの姿勢で並ぶ菊花壇
思惑があつて値札をつけてなし
一人ものころっと死ぬよう手を合わせ

京都市 都倉求芽

ただ一人待たす深夜の赤信号
折り方をおぼえてそれか鶴ばかり
削り器へ個性のない鉛筆
内職の妻の肩揉む夜が静か

岡山県 岡村久志良

病後初の上阪

テストケースその長旅へ友があり
大阪だせめて背筋をのしとこう
あたかい歓迎の座はもう掘り炬燵
温情をそぶりに見せぬ貫録か

諫早市 大崎筆染

頬つべたがふくれ風船まるくなり
放心へ煙草の灰もつれて伸び
半生の重荷を語る座りだこ
守銭奴のある日善意も見直され

姫路市 隠岐不酔

晩酌は飲めとお医者もひらけてる

舞扇のためば下手も拍手受け
惜しまれて未練残さず菊作り
宿帳をうまくだました女秘書

西宮市 若林草右

クラス会にて(一句)

禿げたのが白髪うらやむクラス会
ルンペンの今日も同じ顔で寝る
倦怠期三面鏡にある埃

鷺羽山へ

玄関は三階と云う崖に建ち

神戸市 仲どんたく

緋袴にミニはきかえてバイト巫女
ざんなんもスモッグに瘦せ御堂筋
雨洩りへ工事費値切ったことを悔い
還暦の駄馬へ一鞭くれんかな

岸和田市 葛城伊三郎

本心を明かし落ち目とは云わず
年頭に疎遠を詫びてそれっきり
金星の呼吸のはずみへ来るマイク
半分は見栄を覗かす市場籠

倉敷市 小野克枝

ためらいも無く一本の矢に射られ

距離を置く遥か向うの人として
妻の椅子ねじ一本をしめなおし
鬱憤を当り散らして父淋し

呉市 林野甦光

民芸の風情にふれた旅の顔
手を解いてアンバランスな愛終る
大学を出たら養子になる学費
ぜいたくな犬です犬の無表情

笠岡市 松本忠三

宴席へ時間厳守はヒヨコばかり
お詣りもせずバスガイド一服し
高校のバッジがキラリ席譲り
食うだけの米も作って課長の座

羽曳野市 榎本吐来

カーラッシュ縫って家路へ踏むペタル
叩いてももう動かない腕時計
不意打ちの帰宅よるこぶ妻であり
饒舌の背後に重いかげを見る

大阪市 宮地双楽

困ったらお出と云うには云うたけど
同郷の先輩尻り目に世代の子
慢性の遅刻の罪を妻にきせ

親光の奈良は小銭のいるところ

竹原市 山内 静水

僕の唄聞いてくれてる娘が一人

公休はいいなあ新聞床で読む

颯爽と歩こう気分はまだ若い

年賀はがき買い込み初春へ身構える

倉敷市 松下 梁水

弓なりになって主張をなお曲げす

産声へ万才ぐっと嘯みしめる

迷惑にされて誠意がうろたえる

都山流尺八準師範合格

ふり仰ぐ山の高さへ身構える

和歌山市 西尾 公作

人生の疲れ古巣に落ち付けり

阿弥陀さん廂を鳩の巣に借られ

子や嫁に茶飲み相手をすすめられ

貼る障子はずされ不貞寝して居れず

大阪市 石倉 旅風

入院（十一月十日）

よしよしとあやし上手に外科科長

名札かけられて病人出来上り

この辺でいっぶくせよと神の声

三階の窓が世間の裏をみせ

鳥取市 河村 日満

大阪にて（二句）

金沢へ日帰りをして孫と寝る

孫のもの予算オーバーも楽しけれ

これはこれは声もはずんで田螺食う

S君に会う

一年も臥てたにしてはよう肥えて

大阪市 市場 没食子

長命の父ありそれに留守しがち

自分からあかんあかんと老け急ぎ

横断歩道孫と黄色い旗を持ち

速達が着かず誤配の泣寝入り

名古屋市 吉田 水車

新年（二句）

初日の出一期一会と思いに

二人で出れば一人はけちになり

エスカレーター特売さして急ぐなり

紅葉忌

公害へお宮の松もあわれなり

門真市 福島 鉄児

意識不明に陥り救急車で入院翌日退院

御近所を騒がせました救急車

点滴が私を娑婆へ呼び戻し
気が付けば妻とナースに見守まれ
意識回復経過を聞いてみるベッド

倉敷市 木村千容

明治四十五年月俸十二円を振り出しに

六十年サラリーマンのなれのはて
ノンノンと食うて寝てきた六十年

日光浴

陽の恵ありがたきかな八十四

夢中のゆめ

競り合うて流れた水を飲んだ海

岡山県 田村藤波

禁酒とは別だと父の屠蘇機嫌

ものの哀れ知りすぎ犬に手をかまれ

現職の強味にも限度来て落ちた

リング真二つあなたと私のハートです

堺市 吉田圭井堂

吞舟の魚は小網をよせつけず

あの年でヌードを探す宿の傘

旧暦で蒔かねばなんにも芽を出さず

問題のない日を探す日記帳

出雲市 弘津柳慶

現実厳し恩師保険を勧誘し

飲み屋街真昼静かに動かない

他人じみた挨拶となる帰省の子

魚きりり川の流れにさからって

今治市 越智一水

軽井沢にて

金もって夏にもこいと軽井沢

からまつがからまつの風よぶ軽井沢

中仙道

仲仙道慕情はひとりあるくもの

戸隠そば

わらぶきの家で食うからうまいそば

守口市 村田瓢太

鹿児島市

桜島と西郷どんで街栄え

桜島熔岩道路周遊

月面も斯くや熔岩道路往く

日南海岸

日本国の最南端を洗う浪

指宿一泊

アダムとイヴにかえってジャングル風呂の朝

倉敷市 野田素身郎

下心あつて酔つたと思われる

二人連れがやたら目につく旅疲れ

二次会へこなくていいのが来て白け

軍歌を唱和するホステスを手放さず

大阪市 水谷竹莊

入院して

入院をしてよみがえる夫婦愛

病歴も古く寝巻も四季を持ち

スマートになったとやせたとは言わず

板前にこれからと云う灯がともり

米子市 林瑞枝

うちの娘も欲しかる嫁の服を褒め

亭主また養子の味方として威張り

世渡りと思えば損得越えて世話

事故ニュースふえて肌着に気を配り

久留米市 永松道雄

あたたかい人生に触れ生きる幸

何もかも日記のメモが証拠だて

家出して渡りつくした児が帰り

春は花秋は紅葉の城の跡

笠岡市 木山要次

信心をも一度奨める岐れ道

狭くとも吾が城なりのごみがあり

見え透いた嘘を長々つけ加え

煎じ薬も灸も効かない五十肩

芦屋市 丸川初甫

同情の眼の中をゆく松葉杖

買わされる妻の野心もう見抜き

飲まされる下戸には辛い宮仕え

朝の掃除二刀流でやる早さ

大阪市 中川滋雀

決裂の煙草は皿へ突き刺され

坪数に直して火事の記事を読む

ぶっちゃけた話になつて借りて去に

一円を落して銭湯に義理が出来

富田林市 浅川八郎

すんだこと問責よりも明日に期す

神不在人間天皇在します

評論家唯吠えるだけ遠く居て

お隣りも美人でなくてやれやれだ

岡山県 浜野奇童

プラットの菊へ駅長ジョロを持ち

検札へ旅の疲れが起こされる

サングラスはずせば知人の顔であり

仲人がとうとう好きにしていまい

大阪市 酒田清子

心臓の鼓動夜のしじまの砂をよむ

新葉へ今度こそはと言う期待

新聞テレビ喘息の文字見逃がさず

静かでいいだらうな貝になれたら

熊本県 有働芳仙

浮動票抱きこむ紙幣の封を切り

人生の峠を下る杖が要り

舌打ちを聞きのがさない電話口

結論へ女裸で勝負する

鹿児島市 土岐トク子

学用に供され医者に礼云われ

合部屋の親娘のいさかい耳によし

くす玉の二つ三つふえて手術癒え

癒着せし腸なで明日の手術待つ

松江市 小林孤呂二

雪にかえる霧氷陽に耐ええす

住みにくいことになったと白い杖

肩叩きうち孫そと孫いて嬉し

お化粧を待つ口笛の慣れている

大阪市 児島与呂志

本人は嫁きおくれたとは思わざり
物干の植木鉢はもうほっとかれ

何んにでも一度はケチをつけて見る

若返り法だと腕を組んで見る

守口市 羽原静歩

城崎にて（一句）

ホラ吹いたポーズのままで写される

再会の偶然のれん分けながら

小企業ですとゴッソリ貯めている

朗々と祝辞の中の反主流

大阪市 河井庸佑

立たされたことは帰って言わずおき

得心をさせて動かすこつを知り

さて起きてすることもない日曜日

宿題でなんや一年生無邪気

（前月分） 富田林市 浅川八郎

ご来迎ついていません雨でした

土曜日は時間ありすぎなさすぎる

踏台にする後輩が頼もしく

外泊許可久し振りや飲んだらか

鳥取市 藤本礎山

利用価値まだあるらしい見舞われる

御近所の計算通り暮したし

はっとした唄が出ている台所

葉飲む為の目醒しさみし過ぎ

岡山県 川端 柳子

はじめの釣書わたしが姑の席

踏まれても蹴られても性善説唱え

進軍のラッパへ良心ついてかず

柿たわわこの家のあるじひとと近く

東大阪市 竹中 綾女

正倉院展出れば山の端虹かかる

七五三無情の雨が降り初め

乗車から下車までしゃべりまだ足らず

菊薫る駅で菊見をすましとき

大阪市 島野 大吉

老の身に時計は秒の鞭を打つ

病室でいつの日履くか靴磨く

どん底で幸運の字はピント来ず

仲人が月賦の裏付けまでさされ

堺市 高橋 千万子

整わぬ物あり冬の音しきり

今一度わびたい人にさけられる

パチンコから足が冷えると父かえる

叱られた犬悪かった顔をする

大阪府 有信 新之助

ふところの金がいや味な口をきき

タクシーに拾って頂く道に立ち

よそ者がビルの谷間にしていまい

二代目の甲斐性が光る総ガラス

岡山県 坂井 三葉

渋かったらしい歯型で捨てられる

若さだけ売物駄馬の群である

霜焼の足を押込みハイヒール

宇都宮 平田 実男

良く見れば亀急いでる急いでる

友達結婚へ贈る(一句)

ほっとけば逃げる仕合せしかと抱け

子沢山朝寝が出来ぬのも嬉し

大阪市 室谷 鉄舟

成人の娘の初釜へかしこまり

口程もない混浴でかしこまり

雑踏の他人許りの中に居る

京都市 松川 杜的

松尾寺

住職の自慢に菊の御紋章

穴太寺（二句）

野仏に菊あり札所へ曲る路

団地の一軒日の丸あげた文化の日

大阪市 西 森 茂

さびしさに盛り場に出てスリに逢い

洗濯をしたよう再婚美くしい

大丈夫猫も夫も食べました

八尾市 香 川 酔 々

懐しい下駄で故郷の土を踏み

聴診器お義理のように当てられる

コップ酒釣銭貰う手のごつさ

出雲市 原 独 仙

別居しているからおじいちゃんおばあちゃん

有ればありなければ無くて年は越せ

停退の今年こそはの欲も出ず

熊本市 楠 田 ひ で 子

ミニスカート母もちよつぱり短かくし

柿ひとつ眺めるためにのこしとき

生命の静かなり まかれない種子

松原市 谷 垣 史 好

瓦屋根黒さは冬の風の色

車内みな他人無気味なほど静か

やっと二人になったら僕の降りる駅

核抜き沖繩返還（二句）

かと云って基地で働く日本人

逃げ腰で老妻傭と戦う気

秋雨の冷たさ鹿も首すくめ

鳥取県 森 田 布 堂

おじいちゃんの棺にキセルも入れてあげ

寝押ししたズボンの筋が二つ出来

地下工事ホース太古の貝を吐き

松江市 吉 岡 通 児

口笛が澄んでる朝の竹箒

豚の餌になる豊作のしあわせ

谷紅葉パレットにない色で燃え

高槻市 福 田 丁 路

昭和四十五年新春（二句）

初春や孫の御慶の舌たらず

オジイチャン馬鹿と皆んなが云うけれど

人生の奇々怪々な舞台裏

高槻市 若 柳 潮 花

ひとりでは結べぬ帯も欲しい歳

球根を植えて春待つ庭にする

昔ほど燃えぬひとさえなつかし

愛媛県 渡 辺 暁 童

角帯に下駄はのせないエレベーター
菊花展その執念の努力賞

月へ行く無駄はよせとも言われまい

下関市 桜川 不水

晩酌も減り六十キロ割って無事

今日の事しるして明日を待つ眠り

秋の鎌早目に洗い風呂にする

奈良市 宮口 笛生

山門が松葉かむって冬に入る

カメラのむその苦しさを聞かされる

七〇年うるさい年が明けるなり

下関市 国弘 半休門

五十肩もまして父の仕事好き

石一つ拾うて桂浜観た記念

七円はもう売り切れて十一月

京都府 大鶴 喜由

草の上下戸に冷たい後の月

松茸も買えず中産ぶっている

意志表示今日を逃がして今日は無い

藤井寺市 西 いわを

ニベもない答えに質問切り上げる

写真ざらい写されるのは疲れます

なごう咲いてくれたと菊へ水をやり

笠岡市 木山 遠二

余命考えず総入歯に金をかけ

菊薫る旗日明治が懐しく

一芸に長じて老の美しき

美禰市 安平 次弘道

公害も活気もなく過疎化する

内気同士チャンスの神をじらさせる

便乗を遺族がなげく交通禍

奈良県 西辻 竹青

かんちがいしたのか親書の返事こず

ストも争ぎも賃上げもなく菊薫る

あやめ池遊園地にて

菊にまでなつて武将の名は残り

兵庫県 河原 みのる

惚れたとは云わずヌケヌケ好きなのよ

麦を蒔く人珍らしや立ち止まり

嫁の荷が着いて此の里手が止まり

大阪市 福井 野迷路

一寸ヨーロッパまでと風呂屋のお婆ちゃん

別荘地ひしめく極東小列島

早乙女に申し訳なし古古米

小松市 浅野 芳朗

熱帯魚四角い世間に住みなれて

二日酔しつこい蠅の足の裏
切れぬ鋸思わぬフシで一休み

倉敷市 小幡里風

うらみ事しきり人形との対話
さよならをして好きだった人と知り
子の無心さかさに財布振って見せ

鳥取県 谷 無閑

機械化となつて名産味が落ち
隣りには又生れなはつたと淋しがり
しんみりと話す女で油断せず

岡山県 大森娛句楽

米食うて大和男の子の力

四男任地仙台を訪れて

寒くとも住めば都の民謡の里
搞いの嫁が東北弁で媚び

ハワイ 上田紅溪

観光バス帰途は舟こぐ昼さがり
葬式で四十年目に合うた友
嫁が来るまでは一軒貸家にし

桜井市 岩本雀踊子

もう少し欲もあつてほしい父
家中の知恵でも話まとまらず
ふれ合うた心も初老と云う夫婦

島根県 藤井明朗

信号待ちでポケットたしかめる
老いてなお盛ん口先きだけのこと
白鳥ご入来 湖に冬が来る

八尾市 高杉鬼遊

アポロ飛ぶさんまも食えぬ年なりき
石合戦如きで平和築く気か
良心のままに動いて今日終る

尼崎市 高津徹也

もやしさへ力一杯生きている
二重丸入れて時刻表しまい
夜寒かな二階へそつと行つたまま

鳥取県 清水一保

生活のゆとりを見せて庭の菊
散り果てる際まで紅葉美しい
夕焼けがあまりきれいで妻も呼び

香川県 岡田拳法

保存会獅子あえぎつつ舞終り
再起まで妻よ寝込んでくれるなや
大暖簾養子のがめつさへ任せ

大阪市 横倉富久一

ひらべったい男の胸にある起伏
勲章を妻にも与えたい再起

貧富の差その差を知った子等の知恵

和歌山市

野村太茂津

巢に帰る性よ人並の我なれば

あるだけの帯出して見て妻の旅

ウインクを盗見される程に惚れ

大阪市

天正千梢

トタン屋根見栄坊へする抗議

愚問だねと夫は夜具かぶり

黙として歩む二人へ赤とんぼ

大阪市

宮尾あいき

柵越して咲いて成程キリン草

豊作が続いて雀無視される

ポケットの小銭の音で孫を呼び

倉敷市

藤井春日

かくれたる手腕も見抜けず管理職

反抗が仕事の鬼にしてしまい

秋風に金魚無常を告げて逝き

岡山県

出原敬一

賊軍の祖先を祖父は誇りとし

神経痛どうして話が通じ合い

縁談が今年もなくて大晦日

和歌山市

土谷城石

味噌汁のおかわりほしい宿の朝

物置を巢に子が育つ余所の猫

神様のようなのがいて邪魔になり

平田市

久家代仕男

十二支へ指折り明治まだ達者

玉砂利の流れに秋の陽がきらり

佗しさは義手ポケットに秋が吹く

枚方市

宮川珠笑

すずむしが庭で鳴くのに飼いたがり

タクシーを待たせて妻に記する酔

食通と云われ社用で肥えた舌

竹原市

森井善居

天無限されど杉には杉の丈

水すまし池の深さをまだ知らず

清貧を恥じる凡夫の身づくろい

松江市

岡崎祥月

上を見て歩き虚栄に蹴つまずき

浅墓な知恵人間という道化

太陽の反抗天地はねかえし

大阪市

西川誓二

定年の息子が母にかしこまり

それとなくあなた任せと云うポーズ

熊野本宮

額は源平栄枯夢の跡

堺市 伏見茂美

通訳の要る初孫が来て楽し

憧れも夢もあんにに摘みとられ

高石市 谷沢好祐

心との対話寡婦其の他に道はなく

雑種でもよしよし朝の散歩させ

僕の配転下馬評は知っていた
マイホーム夢の又ゆめ子沢山

大阪市 川口弘生

拙なさを知る時我意も崩れ出し

一斉値上げ新聞よお前もか
二十年完済それまで寿命あるとする
堺市 藤井一二三

守護神の油断の間に溝へ落ち

己が非をかばわんとして嘘が出る

再会は共に屋台が似合う服
考えてみればやっぱり振られて居

姫路市 村上春巳

メインストリート夜の白壁の城の位置

和歌山市 垂井葵水

中天の月葉師寺の黒き塔

角切りのニュース人生の奈良想う

水よりも水色に透く熱帯魚
八百長であったと知らぬ馬の汗
堺市 新谷笑痴

竹原市 時広一路

足跡を渚は消してくれていた

答えてはくれぬ潮騒だけど好き

商塊のバーゲン暮れをせきたてる
一日の話題夕餉の笑い声

散策の足止めさせて菊匂う

人間のエゴに染った川の色

小松市 四方天弘実

つるし柿黒ずんで来て山白し

せせらぎの流れ変らず村は過疎

日生諸島にて
小島に住んで交通禍を知らず

燈明が揺れず仏壇電化する

島中が親類と知らず聞合せ

兵庫県 大江秋月

停年も近づき言いたいことも言え

山の幸贈れば届く海の幸

食通の先輩路地の裏も知り

広島県 高橋鬼焼

悪友になれそうもなく灯をさける
長靴の重みもうれし水たまり
叱つてもむだ反抗の口をとじ

島根県

小砂白汀

短針の悠々せまらぬマイペース

直球のような男で痛打され

人間不信鳩とび立ったが舞いもどり

島根県

堀江正朗

空想をこわすせわしい妻の下駄

人頼みめくらあせつてもあせつても

ズボン脱いだら年寄りの足になり

大阪市

今西章雅

赤札に目の効く妻で愚痴云わず

年頃の子のいぬ安堵火焰瓶

八尾市

古川鶴声

プロボーズ確りやれと背押され

開拓の丘に先発隊の墓

松江市

中川晃男

おとぼけですませるつもり憎い人

柿赤く夕陽に映えて過疎の村

笠岡市

出原真奇

十九平さんからはもう来ぬ年賀状

豊作の稲が小言の種となり

漬物がなけりや済まなんだ妻の朝
妬くことを忘れて妻は逝つてもた

伊丹市

小川静観堂

チクロ禍を騒いで煙草よく吹かし

雨の信濃旅行

西宮市

島居百酒

雨煙る高さも寒し霧ヶ峰

松江市

柳楽鶴丸

晩秋の向うに寒い寒い冬

人生へ東風も吹けば北風も吹く

岡山市

荻野鮫虎狼

ボinasを使う予算が出来上り

赤字線ほんまの日本が残つてた

小松市

馬場魚山

入院をしてから白の中に生き

いびかく人退院をして眠れ

加賀市

細呂木魯木

云い過ぎた叱言へ少し気嫌とり

見栄と財布のジレンマ悪へ入りそう

京都府

清水谷句楽坊

元且や浮世双六ふり出しへ

死に急ぐ事もなかと屠蘇の盃

★

川村好郎

八木千代、林瑞枝さんを訪う

日の丸のお迎え受けた初対面

真情をそのまま大山霽れあがり

晩秋をかみしめ登る清水寺

柳談は尽きず皆生の夜が更け

この次は大阪で会う手を握り

西尾 栗

あほになっときなはれという母があり

支那栗の袋そのまま母眠る

紅葉寺明治の夫婦手をつなぎ

七五三ゲバ振る子になるとは見えず

一席のニュース写真のむごいこと

北川 春 巢

巫女の顔色疲れか生理日か

木曽路のドライブ (十一月十五日)

木曽路はすべて山の道である // 藤村 //

山の中にも舗装した道つづく

柿の実の色も木曽路という赤さ

山の宿ひなの美人の唄に酔い

聞いて来た山菜料理いけますな

若本 多久 志

北播の古寺巡り

丈六の弥陀裾のあたりに秋の冷え

重文の塔堂秋のうす陽さす

邪恋燃ゆ聖しこの夜のバーの隅

老妻にかくし事なし年の暮れ

流れ雲六十七の年の暮れ

菊沢 小松 園

子の意地は親の通りにせぬ積木

振り向きもせずに別れる自尊心

奥の手があつてその場は女負け

うたがわれそうなところでみつけれ

美しい蠟人形も恋を持つ

清水 白 柳

反戦の旗を見おろす鳩の脚

思慕足らぬ鼻をくすぐる白いネギ

徹夜の眼優越感に濡れている

慰霊碑へ無言のままの母と子と

出世した順に大きな犬を飼ひ

梅志句集・一月末 送本予定

故

服部十九平句集出る

定価五百円
送料三十円



大阪大学医学部卒業同期生総会旅行伊勢スカ
イライン・朝熊山頂にて主幹ご夫妻

新春雑話

中島生々庵

歳を送り歳を迎え、私達の「川柳塔」も誕生してから満三カ年三カ月、五度目のお正月を迎えるわけである。皆様の暖かさに抱れて、予期以上と言えはおこがましいが、先ずは順調に育って呉れた。送ってしまった一年位はまたたく間のようでもあるが、全く秒読みで追っかけられる思いで一杯の過去の姿である。殊にこの一年間というものは「川柳塔」が歩いて来た路だけでなく、世相のあわたたしい混乱振り、泣いたり笑ったりだったとあっさりすまし込んで除夜の鐘の音と共に聞き流すには余りにもけわしい足跡ばかりであった。勿論、幾たび、幾たび迎えても新年というものはきびしい「いのち」の胎動を感じさせるものである。しかもその胎動のきびしさは、この両三年位前から、お正月気分分の「のんびり」ムード等とても微塵も味わっておれぬ世情であるし、台詞を忘れた老優がプロンプターたよりで舞台をつとめるさりげない顔の芸当は絶対に許されぬきびしさである。

EXPO '70

迎春

川柳塔

参事一同
常任理事一同

できたての生ビール

アサヒビール 本生

レーベルの日付けは新鮮なうまきのしりです

あの寒風の中に一輪一輪とすがすがしくほころぶ梅の蕾には、大自然と共に無為に眠っていたかに見える長い長い冬の試練があった事を忘れてはならないと同様に、私は「川柳塔」の責任者の一人として、しみじみそれを惟うのである。

明治初期頃まで、鼻唄まじりの遊びとしてしか世の人達に扱われなかった「川柳」の時代は今日から考えてみると将にその冬眠的時代であったのではないか。少しく柳史を繙いて見れば簡単にその辺の由来が符節を合わせたように諒解出来ると思う。

明治二年に阪井久良俊が横浜に、明治三年に井上剣花坊が山口にと期せずして東西に生れ、その上剣花坊は二十才にして東都に遊學するという宿命的機運が待って居た。こうした川柳中興の祖と称せられる人達が活動を始める前後、即ち明治二十一年に麻生路郎、二十二年に村田周魚、二十三年に相元紋太、二十四年に川上三太郎、二十五年に岸本水府、二十八年に富士野鞍馬、三十年に前田雀郎等と黎明を告げる羽ばたきも遅く、諸先生が出生された事は、これをしも偶然の時の流れとばかり受けとるわけには参らぬと私は考えるのである。このように次から次に不思議とさえ思われる諸先生から繰り出される宿縁の糸に嚴重にからまれながら生れ、育ちゆく私達の「川柳塔」の姿を静かに、そして謙虚に思い併せて観ずるときに新春の嚴肅さは一層身辺に迫って来るものがあるのである。

動物であらうと、植物であらうと、生きとし生けるすべての「いのち」が新しく活動を始めるのが新春であるとすれば、私達はうしろから追いかけて来る「過去」を徒らに振りむいてばかりしてはならぬ。あく迄も前方からさし招く希望の耀きに向って突進すべき気構えが是非必要である事も謂うを待たぬ。そこに若き「川柳塔」の進むべき道を強く意識すべきであると思うのである。どうぞ本年も倍旧のご親情とご鞭撻をお願いして新春のご挨拶とし、諸先輩同僚のますますご清健を祈念してやまぬ次第である。

麻生アート 麻生 葎 乃

630-02

奈良県生駒本町八番五号

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に
多々薬品



アリナミンA

川傍柳 初篇研究

(七十九)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 高須唾三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

596 貴様は酔ぬおれが酔たとだまし

卅 弓

藤井||酔ったという奴は酔わぬ、酔わぬという奴は酔っている酔客心理と、酔わせておいて何かたくらむ御馳走政策を、「だまし」に含ませている。今も昔も交らぬこの世界。

高須||何かたくらむというほどのことではなく、俺は酔っていないんだと威張っている酔漢に、まだ酔っていない仲間が「そうだ、そうだ、お前は酔っていない俺が酔っているのだ」と、だましましたし介抱している図で、今でもよく見かける酒場風景(酒場でなくてもよい)である。

よったぞよったぞと来るはこわくなし

一九・六

前田||諸説に賛。「だまし」に含みが濃厚で、いろいろと読者に問題を与える佳句。

丸・岡田||高須説に賛。

597 観音へ日参をして手を握り

梅 枝

藤井||浅草観音参拝は口実、門前の二十軒茶屋に日参して通いつめたあげく、娘の手をやつと握った。既出「手を握る所へぎんなん一ツ落」と同工異曲の句だが、後句の方がすぐれている。

高須||楊枝見世か、水茶屋か、どっちにしてもお見かけの娘があつての日参で、そこまで来ているながら、観音様には手も合わせぬ、困った信心があつたもの。

丸・岡田||礎稿に賛。

598 土用ほし小袖で乳をのんでいる

卅 弓

藤井||「もううものなら夏でも小袖」といって、小袖は裏付で夏は着ない。土用に掛つた小袖を欲しがつた子に、意のままに

着せて乳を吞ましている土用干し風景。子供は珍らしいことを好む性質がある。

高須||子供に小袖を着せたのではなく、母親が小袖を着てみたところへ、子供が乳をせがんで来たので、そのまま乳をのませている図ではないか。

土用干どこか女房が見えぬ也

傍三・19

見つけたところは、婚礼衣装の中? 前田||礎稿に賛。小袖は絹布の綿入。「虫干に小袖着たが頭是なさ」(七三)の類句がある。

清||同。「小袖で飲んでいる」の主語は子供。高須説のように母親を主語とした場合は「小袖で飲ませて」と能動的にならなければならぬ。

丸・岡田||賛。

599 蟹の表徳を帰柳と付る也

一 甫

藤井||当世風の風流男は、それぞれ表徳といつて俳号をつけた。鴛は恐妻家でつきあひには別行動をとつて帰宅してしまふ。悪友連中曰く、あいつはいつも見返り柳あたりから、かあちゃんの所へ帰つてしまふから「帰柳」とつけてやろうと。既出「遺手」が表徳金笑とつける」と同じ傾向の句。
川端||賛。

士手で別れる鴛の名はよさう兵衛

丸・岡田||賛。

600 観音は信じ大日をバ殺し

眠 狐

藤井||本田善光が難波の堀から百済仏を、或いは浅草の観音様を宮石川で網であげた浜成兄弟にしろ、共に観音様は世に現われて、今に至るまで信じられて盛んなのに、「汝生身の如来を拝せんとせば、江戸伝馬町佐久間某の下女を拝せよ」との夢のお告げを信じた僧侶がその主人に遇い、下女を拝したら、大日如來の姿と化し忽ち消え失せて求め得られなく、これではいらぬことをして殺してしまつたのも同然だということか。なお、観音は浅草の方が同じ江戸だから、浅草をとりたいが。

高須||景清は伯父の大日坊を殺害して、自ら悪七兵衛と名乗つたが、そのくせ清水の千手観音を信仰していたことを言つた句と

の柳雨説に従ひたし。

清||大日如來を詠んだ句は、そのほとんどが「下女」「お竹」となっており、しかも如來様とは気づかず口説いたり夜這いをしたり非常に人間臭く詠まれている。主題句は、やはり柳雨説の如く、平景清を詠んだ句としたい。

丸・岡田||景清です。

601 この野郎といへば母きこへます

眠 狐

藤井||「この野郎だうちの娘をこんな目にあわせた奴は」「まあまあ大きな声でお隣りさんに聞こえますよ……」と九尺二軒の長屋で娘ゆえにおきた夫婦の会話。

どこの野郎と怒る父と聞こえますよと鎮める母とを、二人の生(なま)の会話で描写した川柳らしい佳句。

川端||娘の不義懷妊。母親は既に娘の口から好きな男の名をうちあけられ、「お父さんには母さんがいいようにとりなしてあげる」と引き上げたのだらうが、寝耳に水の父親は激怒したことだらう。礎稿賛。

高須||ナマの会話を二つならべた句だが、こういう仕立て方の句も珍らしくはない。前出の「貴様は酔わぬ……」なども同様の趣向だが、こは「娘のところへ遊びに来ている男」を見ての父母の会話ぐらいで、

そう深く不義とか妊娠とかまで考える要はないか。

前田||言葉のうらに娘、そして荒れている父親、それをなだめている母親と、かなり複雑な場面である。その内容はいろいろとれるが、各自いろいろ趣向をこらして妙。清||高須説であらう。乱暴な言葉使いをずる親父だが、娘への愛情はかくせない。遊びに来ている男へ興味ありげな面持ち。

丸||諸説か思ひすごしのようだ。私は息子を誘ひに来た悪友に対する父親の怒りをこめて「あいつどこの野郎だ」というと母親「そんな大声で、相手に聞こえますよ」とハラハラする場面と見ている。

岡田||丸先生説に賛。娘に手をつけた怪しからん男になら、聞こえたつて一向差しつかえない。

八木摩天郎著

古川柳に 詠まれた 堺の人々

送共 75円

堺市南清水町32

新谷 笑痴

ユーモアについて

北川 春 巢

「俳風柳多留」が出ていることは、古川柳がユーモアに関係あり、と世人が見ていることを示すもので、特筆に値いと思う。

本稿は、前記河盛先生の本によって書いているので、「ユーモア」が主題である。私が今までに書いたのは「笑い」が主題であったから、本稿は論旨が今までとは多少違ってくるかも知れない。ご了承願いたい。この本には「ユーモア」の定義が諸家の説を引いて色々書いてあるが、どの定義も納得の行くものでない。「ユーモア」の定義を、ひと口で云おうとすることがどだい無理なのである。

「ユーモア」を英和辞典で見ると「滑稽」「おかしみ」と出ている。が、英語の「ユーモア」は英国人の気質から出たものであって他の国へはいっても、その国のこととは云い換えることのできないものである。日本語の「滑稽」とは多少のニュアンスの違いがあるようである。仏語の「エスプリ」も日本語に訳せば、やはり「滑稽」になる。しかし「エスプリ」は意図的であるのに反して、「ユーモア」は非意図的であるといわれている。現代川柳には、ユーモアよりも、エスプリといわれる滑稽の方が多いと思う。エスプリの方の滑稽が、われわれのいう「穿ち」の句であって、これが「笑い」を引き起すように思われる。（河盛先生は、残念ながら日本文

私はユーモアについてただ常識的に何回か書いて来た。しかし今に至るまで、ユーモアの理論について分らぬ所が多い。ユーモアすなわち滑稽と思ひ込み「滑稽」はすなわち「笑い」というような意味のことを書いた。しかし、若しそうだとすれば、現在の川柳には比較的「笑」が少なく、これは事実である。私はその後も「笑い」とか「滑稽」とか「ユーモア」とかの文献を読み漁った。しかも「ユーモア」に対する真の理解にはまだ到達していない。

昨年十月、岩波から河盛好蔵先生の「エスプリとユーモア」という本が新書版で出た。本稿ではこの本に従って、「ユーモア」と川柳との関係を考察してみたい。私の頭からはどうしても「ユーモア」という標題の文字が抜け切らないのである。

その前に報告しておきたいことは、この本

- の巻末に岩波書店刊行書の広告が載っている
- (一) 笑いについて (新書) パニョル著
 - (二) 初めに行動があった (新書) モロワ著
 - (三) 日本の方言 (新書) 柴田武著
 - (四) 心で見る世界 (新書) 島崎敏樹著
 - (五) 古川柳 (新書) 山路閑古著
 - (六) 笑 (文庫) ベルグソン著
 - (七) 俳風柳多留 (全五冊) (文庫) 山沢英雄校訂
- 以上七品目である。(一)の「笑いについて」は以前、私が「川柳雑誌」上に「川柳における笑いについて」を書いた時(昭和三十五年五月号)のテキストである。著者のパニョルはこの本の中に「人は何を笑うかによって、そのひとの人格がわかる」とも書いている。近頃の川柳で人が笑わないのは、句にユーモアがないというより、それを読むひとの人格のせいかも知れない、とも思うのである。

ともあれ、この広告の中に「古川柳」や「

学には言及しておられない。)

日本文学の「笑」を書いてあるのは、麻生磯次著「笑いの文学」(講談社)である。麻生先生は、本書の中の「洒落と滑稽」を論じた所で「洒落は作るものであり、滑稽は発見するものである。」と書いておられる。前のエスプリとユーモアとの違いにもやや似ているようである。エスプリはまた「機知」とも訳されるので、「洒落」と似ているようだ。

しかし、日本語で「機知」と「滑稽」といえば、全然違うように聞えるが、これが案外似てみるのである。「エスプリは似たところのない二つの対象の間の思いがけない類似を発見することであり、ユーモアは、互いに両立することのできる二つの対象の間の、相容れない部分を証明することにある」とも説かれている。

また麻生磯次先生は、芭蕉こそ、あるいは蕉風俳諧こそユーモアの最たるものだ、と説かれ、「ユーモア」を「有情滑稽」と訳しておられる。その例として芭蕉の句。

蚤虱馬の尿(しと)する枕もと(「奥の細道」という句を挙げておられる。「まことにほほえましい句である」とのことだが、これは下がかった「尿」ということばがあるために、「おかしい」のであって、私には上品なおかし味は感ぜられない。また

年暮れぬ笠きて草鞋はきながら 芭蕉

という句にも、「ユーモラスな気分が漂っているように思われる」と書いておられるが、私にはそれほどユーモラスには感ぜられない。これくらいユーモアなら、川柳にはたくさんあると思うのである。そうすると、パニョルの「何を笑うかによって、そのひとの手柄がわかる」という名言から、私自身の手柄が心配になるのである。

昨年十一月七日の毎日新聞に

ま夜中に目ざめしわれはうつらうつら

人を憎みてまた眠るなり(橋本徳寿)

という短歌が出ていて、山本健吉氏がこの歌はユーモアに富んだ歌である、と評しておられたが、この歌からも私はそれほどのユーモアを感じない。私はまたまた自身自身が情なくなつた。

あまり理論的なことはかり述べていても面白くないので、私は以下に滑稽な(と私が思う句を、手許の雑誌や句集から拾ってお目にかけてよう。これはそれほどユーモラスではないと思われる読者もあるかも知れないが、そこにはやはり人柄の違いがあるのであろう。

またその滑稽が「ユーモア」なのか、「エスプリ」なのかはては「有情滑稽」なのか、今までの説明から考えて頂きたい。エスプリによる滑稽ということであれば「ユーモア特集」という標題には反することになるが、お許

し頂きたい。句の説明は「ユーモア」を台なしにするので、しないことにする。

ぶちぶちと数の子お金をかじる音
年賀状巧みにくじをよけて来る
マネキンの美貌で着てる柄が売れ
すっぱんがバックに見えた月夜の道
影法師下手な踊りにつきまとい
恋人へパツタリ会った空財布
ちよこなんとおん丈ひくき石仏
視度ためす吊皮広告ひるがえる
こおるぎに上手も下手もなかりけり
外したら内の子になるサングラス
腕時計動かなくてもいいのんよ
馬鹿にした挨拶今日も飲んでるの
葬儀の短かさ犬もついて行き
立話長うて犬も坐り換え
背の子と一つ違いで歩かされ
佃煮にする程花の種を取り

謹賀新年

福井野迷路

大阪市南区鰻谷中ノ町四

笛生 呉人 文秋 伊三郎 芳一 旅風 葵水 梅志 城石 豆秋 娛句 粗影 薰風 ライト 文絵

同人作品

大仏の仁王が出てる月明り

大阪市 後藤梅志

奈良東大寺のひろ庭は、折柄の月夜にひろ

きこと、明るきこと限りなし。ふとみる!!

仁王さまが歩き出していた。という虚構の句。

大阪市 橘高薫風

かたつむり国際電信電話局

旧作である。今はスマートな送受話機になっていたが

以前は両耳を蓋して交換嬢が並んでいた。蝸牛の角がア

ンテナに見えたのだった。

大阪市 大坂形水

家族湯へ大阪からの電話です

商売を忘れて、ゆつくりと家族連れできた温泉だのに

……。銀行やお得意先は帰りを待ってくれません。

岡山市 浜田久米雄

男女とはうれし半分ずつ生まれ

男ばかり生む夫婦、女ばかりの家もあるが日本の総人

口は約半々。男が多すぎても女が多すぎても困るのに神

様はありがたいものだ。

愛人と知らず仲人写真見せ

倉敷市 藤井春日

それは大変お美しくお家柄と云いお人柄と云い——仲

人様ご苦勞様本人同士は毎日デートでお楽しみ中です。

島根県 藤井明朗

勘のよい妻で言訳ほねが折れ

ほろよい機嫌で、それでも土産を提げてわが家へ帰る

さて今夜はどう話すかと、「只今」「お帰り、今夜も忘

年会ですの」

京都市 松川杜的

片腕も器用にはじくパチンコ屋

人間男として生れて勝負事の嫌いなものはない。馬、

ジャン、パチンコ屋に浮き身をやつす、たとえ片腕が

なくとも……。

大阪市 酒田清子

人間修理機械のように涉らず

斗病生活自己嫌悪になる事屢々そんな時川柳と言う強

い味方と、姉（一栄）の家族ぐるみの温い支援に今日迄

救われて来ました。

大阪府 清水 白柳

こんな玉ころがすだけにあるルール

どんなことでも規則にしなければならないとやってゆけない人間が多いのは仕方がないとしても、せめて遊び位は好きなようにしたい。

大阪市 西出 一栄

痩せなさい医師はたやすくおっしゃるが

「痩せなさい心臓が楽になりますよ」と、先生は軽くおっしゃるけれど水を飲んでも肥える質、それに食べものの誘惑に人一倍弱い私。

倉敷市 本田 恵二朗

影の方がよっぽどスマートだよ君

なるほど影の方は、おつむの薄いことも、時々神経痛を起す腰のぐあいも、黒一色だから幾らかましであろう残念だが負けておく。

青森市 工藤 甲吉

尻餅を突いて大地の味を知り

九州場所千秋楽の日、こうして休場、やがて引退した横綱を思い出しました。不確かですが「国民川柳」に三太郎先生選で抜けた句。

香川県 三井 醉夢

江戸っ子のさっさと歩の早し

魔城と化した東京以来の上京だった。思い出をまさぐる田舎者の胸中に容赦なく、うまいコーヒーをおごるからと、老人の足の早いこと。

京都市 都倉 求芽

奇遇奇遇晴着同士がとび上がり

「山田さんと違うの！」「ヒヤアノミツチャン、セツチヤン、ちよつとも交ってへんな！」正月の駅前に振袖が大きく舞う。

倉敷市 水粉 千翁

ひょつとことおかめでおどりつかれない

それは私達夫婦です。波乱を背負う人生に、生き抜くうとする二人の人間の精一杯の笑いに、果して何が泣いてくれるのでしょうか。

大阪市 宮尾 あいき

伸びる筈無いに虫歯は根を残し

孝行するから永生きしてや、早よ歯直しんかいなど、子等は云う。歯医者嫌いの私は思う。この虫歯の根、伸びる新葉出来たらなあ。

同人作品

揚幕で出を待つ馬がくしゃみする

大阪市 山川阿茶

私が楽屋から奈落を通り揚幕に帰って来た時のハプニング、開幕寸前だったので馬よりも私達の方がどきっとしました。

妻だけが染めて私に染めさせず

大阪市 金井文秋

妻が白髪を染めているので、わしも染めようかなあと云うと、あんたやめときなはれ、わてが姉さん女房に見られますがな。

格子なき牢獄内で飼育され

諫早市 川岡 靈眼子

家中誰も代りの出来ない霊能者である私。遠近を問わず飛行機での客もある。それを思えば自由に門外出はかなわぬ鉄格子の中。

ビールとは知らず缺席口惜しがり

鳥取県 清水一保

「会は盛会でも其の後がさっぱりさびしくてね」

「いやこのたびはビールに刺身でね」

「それ、ほんとかい」

声がわりしてもやっぱり要るオヤツ

竹原市 山内静水

日増に女ばく成長している、女の子も喰い気は別である。いや妻に言わせれば私が一番手におえない赤ちゃんらしい。子供と同じ分量のオヤツを与えられている。

ふと気が変わり香奠止めにする

藤井寺市 西 いわを

知った時は香奠をと咄嗟に思付いたが、偕て最う一年近くにもなり左程でもない知人への心変りに人の気持はこうも変転するもの？

帯もろて着物もショールも買わされる

大阪市 川口弘生

テレビのクイズで帯があたって女房孝行が出来たと思つたら、帯に合う着物それからショールと平素の不孝を思い知らされた。

退庁のサイレン ベルトを締めなおし

倉敷市 野田 素身郎

終業のサイレンを聞くと元気になる、仕事は済まないが、夜の帝王の異名を贈られて悦にいつてる奴がいる。そんな奴が羨ましい。

冷凍やろと妻の料理を馬鹿にする

大阪市 正本 水客

松葉がにのシーズンだが、北海の冷凍もので我慢するハゲのチリをつつきながらこれは活けものですよという妻の眼をみるまでもない。

大阪市 天正 千梢

授乳時間ママの雑念も吸うてくれ

未熟児で生れても二三カ月立てば、張りつめたお乳の吸う力の強い事、ママの雑念まで吸い込む如し、たのもしき日本男児

高槻市 傍島 静馬

ちよきちよきちよきおやし垣根をトウにする

好天に朝から生垣の剪定に取りかかったおやし、ちよきちよきちよき鉢はいとも快調に、ためつすがめつ夕方までかかってやっとこの有様ノ

下関市 桜川 不水

貧乏もよきたい肩凝るでなし

肥後訛りを織り込んだ、若い時の句で、金持に対する小さなひがみか。貧乏人の負け惜しみと言えばそれまでだが。

ごゆっくりとお茶とお菓子で放つとかれ

芦屋市 丸川 初甫

予期しない客、しかもあまりうれしい客でもない、こちらはいまてんやわんやの忙しさにあるのだというのであろう。目に見えるようだ。

守口市 羽原 静歩

指圧した方がお先に逝てしまい

とかく浮世はままならぬままになつたらもうしまい御用心ノ御用心ノ

大阪市 本庄 金三

老婆までが綺麗な足に見せたがり

シームレスのお古をつづくり乍ら、老婆の云いぐさ「内の娘は穿きませんよ、これはキズ物ですもん」です、と……。

堺市 伏見 茂美

押し出しは良いが口ぐせ金が無い

「あんたそれ言わなんだらええ男やのになあ」「さうでつか止めたら結婚してくれますか」ということで娘の婿が決まりました。

姫路市 隠岐 不醉

どう書けば呉れるだろうかと子も苦心

明治生れの頑固親爺、下手に書くなら学生の方才でと来る、と言つて他に無心を言う処なく此処は一番泣落しと行こうゲバ棒の祟りか。

名古屋市 吉田 水車

エスカレーター特売さして急ぐなり

たいていのデパートの特売場は一番上の階にある、頼むエスカレーターの速度は、はやる心とうらはらはらにそりそりとして押しあげる。

高槻市 福田 丁路

祈禱料ばかりは値切る勇氣なし

値切る事を趣味にしている友人が、持病に悩んだ揚句の果て神社に祈願し、特別御祈禱料を値切らず奉納して来たと苦笑い。

出雲市 弘津 柳慶

子を二人お風呂に入れて風邪を引き

腕白を二人、お風呂に入れて、逃げるのをつかまえて頭を洗っていると、一人は水をひねり出す、とうとうおやし殿、ハクション。

東大阪市 久米 奈良子

子になるといふ顔のあどけなさ

「隆ちゃん、オバちゃんの子になる?」「なる」「そんならおかあちゃんとうてうてごらん」「おかあちゃん」という次第でした。

東大阪市 竹中 肖二

寝返りを打つ時だけは軋止み

旅行の朝、空いていた五六人の真中の床にもぐり込んだのはよいが、両端の人の軋で仲々寝つかれないまま軋を観察した時出来た句。

東大阪市 竹中 綾女

又財布掏られて漫画にもならず

主人は、胸と尻のポケットから、私はハンドバッグから、財布を掏り取られ、互に腹を立てたり、笑い合ったりしたものです。

岡山市 川端 柳子

亭主関白うちのひよこもある素質

「ハンカチ位洗いなさいよ」「ボクがしたら母ちゃんの仕事なくなるやんか なあー お父さま」

四人目もおんなでしたと宮参り

大阪市 石倉旅風

人間月に起つても尚、自由に男女を産むこと儘ならず
願かけた神に向つて諷刺、諧謔を試みる仕儀と相成る。
可愛氣多き庶民よ。

出て行けと云えぬを養子齒痒がり

神戸市 仲 どんたく

戦後強くなつたものは、
靴下と……だから養子にあらずとも。

山家育ち賞めて師道にある媚態

大阪市 本多柳志

「先生書きました。見て下さい」「どれどれ……仲々
よく出来ました。君の筋がよいから、勉強して下さい
ね」商売と云う自嘲。

迷い子札どおりケロッと届けられ

大阪市 中川滋雀

親の心配や近所の騒ぎをよそに本人は月の世界へでも
行つて来たよに、ニコニコとポリさんをご同道、誘拐で
なくて良かったね。

銭別を貰い不満をぶちまけず

出雲市 原 独仙

「君、こりゃあほんの氣持ちだけだが……たまには又
遊びに来給え……」「はあッ……ありがとうございます
部長も元氣で……畜生ッ!!」

あんたのは目薬であかん老眼や

富田林市 浅川八郎

まだまだ若いつもりで、
居ったのに……
齡ですわい。

足で戸を開けて敷居にけつまずき

鳥取市 小林 由多香

横着をするものでは
ありません。
このぶざまなかつこう……。

宣伝カーぶんわかムードで納期です

小松市 四方天弘実

三大義務なんて固いこと言わぬ時勢だが低姿勢で、パ
ッチリ絞られることには変りはない。オオ寒い……。

同 人 作 品

倉吉市 奥谷弘朗

無理をしたらしいダブルがよく似合

小役人にしては相当無理をして新調したダブルの背広
のようだが。

馬子にも衣裳とか、何んとよく似合うことよ。

大阪市 河井庸佑

自動点火マッチのすれぬ子に育ち

理科室でガスバーナーを使う。マッチの使い方まで教
える。なかなかマッチに火がつかない。

わたしのうちは、みんな自動点火よ……。

岡山県 横山一声

松の内飲まねばならぬことばかり

「酒が飲めないのではやいて居るのではない、酒を飲
む口実をつくらなくても次々と飲む機会が待って居る年
末年始であるが、特に松の内の酒は格別の味である。

富田林市 岩田美代

あきらめがすぐに出るので腹が立ち

何事もあきらめが大事と言うけれど……。

事によりけり腹立て乍らもこれもあきらめ症とあきらめ
ております。

鳥取県 森田布堂

新婚は風邪も仲よく分けてひき

或る寒い日にホヤホヤさんとこへ集金に行ったが、二
人共カゼ熱で来月分といっしょに支払うからと断わられ
た。モーレッツ？

大阪市 室谷鉄舟

素通りをする気の傘を見破られ

懐具合事情もあって素通りする心算だったが、突然「
ムーさん」……あちらよりこちらがびっくり……しや
ない。

竹原市 森井菁居

邪念捨て給えと寒の月が澄み

「菁居さんもうすぐ二児のパパね。愚かな気を起こし
なさんな」自責の念にかられる私。月と対話出来るのも
川柳のご縁にふれたお蔭なのです。

岡山県 出原敬一

親切が身にしみ今は呼捨てる

重傷の怪我が治ったのは医者のお蔭でなく、親切にし
てくれたナースのお蔭と一途に思い込んだA君、求愛
——結婚そして現在……。

後輩にスタミナ源をすすめられ

和歌山市 垂井 葵 水

「手入不良」と従兄の齒科医に叱られ、最近メガネの厄介にもなる。「これからだっせ先輩」とおだてられる夜のネオンが眩しい。

大阪市 有信 新之助

風鈴はとび台風の朝があけ

風鈴好きの私でしたが、すっかり軒先の風鈴を忘れていました。朝になってみれば短冊はうせ、風鈴だけが縁の下に転がっていました。

堺市 河内 天笑

ため息をつけば喘息また暴れ

ユーモアとペーソスに溢れた句を、いとし・こいし御兩人あたりが漫才に織り混ぜ乍ら川柳の愉しさを紹介してくれたらゴキゲン。

貝塚市 野坂 つき子

回り道知ってて恋がかえさな

恋には時間はないもの、誰れでも好きな人とは、一秒でも一緒に居たいもの。彼に送らせて遠い方を選ぶ、女性の心理でしょうね。

血統書つきたいような娘に育ち

堺市 藤井 一二三

初歩教室恵二朗師の選。処が句と異り吾が娘「血統書つけても売れぬ娘に育ち」となった。その特技は寝ること、食うこと、親の心情、ああ。

大阪市 不二田 一三夫

鏡のウソつき着物が左まえ

ありのまま、シワまでうつるから「鏡は正直」というしかし、正直者の鏡は右を左にウソをつく。世相もそんなものではないか。

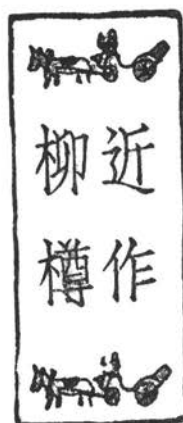


中野の都こんぶ



中野物産株式会社

本社 工場 大阪府堺市大仙町104 TEL.0722-41-9505
東京営業所 東京都中央区西3-11-9 TEL.03-625-2705
名古屋営業所 名古屋市中区5-14-2-1 TEL.052-571-9506
福岡営業所 福岡市上区2-9-1 TEL.092-35-1411



菊沢小松園選

松江市 大 峠 可 動

生きる苦と戦う男汗光る

馬鹿になる限界線をみうしない

毒舌の摩擦にふれて背を向ける

郷愁を窓に忘れてたそがれる

人の詩も私と同じことをいう

竹原市 三 宅 不 朽

帯の嵩帯の重さよああ女

真夜中に飲む水しかとある天井

もしもゆび五指を揃えて見ていたり

春秋の後姿を犬も持ち

泣かしとき泣かされ向い合う寝顔

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

ハンカチの演技告別式をシュンとさせ

寡婦哀れ男結びの巧みなり

かかる世に子に稲束を背負わせて

阿呆な子を送る豪華な霊柩車

出雲市 王

直感力利を追う時に外れていう

平等に太陽が欲しビルの裏

悪党の常 被害者の顔で居る

狂人の語る未来を笑えない

広島県 岩 谷 二 三 枝

生きてゆく此の掌で巻こう今日のネジ

有為転変曇るお前も移りゆく

不本意な積木だけれど崩せない

泥まみれの両掌で遮断機をあげる

島根県 堀 江 芳 子

夫らしく労わり夫らしく小言

心までくじけぬ貧の楽しさよ

漬物の歯切れ若さをまだ誇り

食欲の秋をチクロが搔き廻し

八代市 船 木 史 朗

紫

結論が出たのか離れ手を叩き
好敵手でしたと勝って居るゆとり
おんな一人帯を買っても噂され

大阪市 小谷葉子

ゴシップを無視演技で抵抗
も一人の私にかえる時 女
美しい言葉で瞳火花散る

人生のエラー らせん階段中腹
岐阜市 市川鱗魚

月かなし地球の足はもう消えず
変節の民ならず祝日の日の丸
カラーテレビ小作の過去は口にせず

大阪市 江城修史

一筋の道は貧しさつきまとい
過去踏み消して新調の靴が行く
真実の愛だよバラよ崩れるな

八尾市 高杉千歩

秋さやか母に戻る駅に着き
新調をすぐ着て出るも親ゆずり
ルージュ引く手元無器用な娘に見えず

東大阪市 宮西弥生

瓦斯栓の不始末教育ママの留守
幸福が待ってる手相抱いて寝る
母に愚痴こぼしながらの終い風呂

守口市 岸本豊平次

五ツ玉が幅をきかして戎さん
内職をジングルベルが急き立てる
後ろからもほめられている角隠し

東大阪市 坂東若芽

病院で鳴くコロギの不仕合せ
染まらないもみじ悩みのある如し
横綱の顔で松茸売れ残り

大洲市 堀内晩風

会計は妻に任した小企業
組板の鯉と観念した手術
人生の知恵の輪とけぬままに古稀

鳥取市 近藤秋星

だましたかだまされたのか式を挙げ
心配は無用小百合もまだ嫁かず
隣りにはピアノも弾ける嫁が来る

岡山市 谷森和風

百姓を継ぐには惜しい通信簿
月旅行日本も漫画なら負けず
同じ物食べても女房だけふとり

出雲市 竹内李朋

コスモスの向うで笑う子を写し
しあわせよ落葉の讃歌ききながら

紫綬褒章

生き抜いてきたのらくろへ紫綬褒章

今治市 古野伶人

錦とはこういう物か祖谷の山
返事せぬことで妥協はしてません
集団面接求人側が試問され

大阪市 和田痴亭

ぬかみその匂い気になる花鋏
ストッキングの皺もあらわに妻も古い
男っぽくおこつてみせて見直され

八幡浜市 別宮すき

白状をなさいと妻の黙否権
十一時まではテレビで気がまぎれ
手さぐりの人生あなただけたより

大阪市 黒田真砂

鍵っ子の内気へ夕陽沈みかね
古日記の頁に踊るお下げ髪
愛の停止線振りむく事さへ憚られ

善通寺市 伊藤歌子

到来の松茸をやつとつゆにうかせ
にわか雨はし物隣りで雨やどり
村祭りお獅子の足にもしわが見え

東大阪市 落合思月

ほめ言葉ばかりで披露宴はすみ
角かくし流石にガムをかんでない
血圧を気にする年に妻もなり

松原市 守屋万竿

新庁舎町長大きな椅子に変え

空気水よごしてしまつてから騒ぎ
新名所空缶の山もてあまし

愛媛県 小笠原仲美

もう用の済んだ相手へ時計見る
今度こそとたびたび云うてみくびられ
有れば有る苦勞というのしてみたし

下関市 志賀木石

民主々義齒痒いけれどそれでよし
小春空心は鳶となつて舞う
愚痴こぼすひまで再建考える

七尾市 松高秀峰

信号を守つて渡る犬を連れ
立場とはこうも変るか労使間
顔色をうかがっている子の立場

大阪市 河野君子

延びすぎた薔薇の虚勢は空へ向き
満員のホーム二人を乗せただけ
拒絶反応薄らぎ中年のミニ

京都府 福村飛龍

味噌汁の我が家の味にあきもせず
甘いもの皆んなチクロに見えてくる
デパートの犬は値段がついている

竹原市 脇本政己

ひかえめにひかえめに石垣の小石
疑心またわいてたばこの火が凍る

掌に受ける白い言葉よ冬もよし

神戸市 来住タカ子

距たりを置きたまされた事を知る
枯葉ばかり集まって日溜りの平和
抵抗にあらず止り木揺ってみる

尼崎市 中谷利美

親の眼に十人並みが売れのこり
警察へすぐ来てくれと子の電話
口ぐせの馬鹿が出るほど癒りかけ

今治市 原田輝親

ハイウエー平安京を斜に抜け
汀線のとおりゴミもカーブして
潮の香の恋しき性は生まれつき

島根県 志賀美栄

初霜がバラの驕りに止めさす
秋風に笑う芒よ明日が無し
子沢山のこる戸籍は唯二人

大阪府 里小路

M寸はもう父だけの用になり
いつの間に引っぱるような子の歩巾
七五三見て来た妻のよく喋り

米子市 増田竹馬

フィルムへ医者視線を追う不安
道楽が本業となる不倅せ
米の寿を祝うつもり一万歩

和歌山県 ふきあげ虎城
買われてる時間で真実のない動き
空転する炎に開らく自動ドア
バスの腹なげては芒立直る

岡山県 山田止水
新聞の広告値上げして読ませ
いさかえば他人にまさる血が憎し
つくづく昭和の月へ立ち止り

和歌山県 増田次章
それでもオアシスですグリーンベルト
戦争を全く知らぬ子らが満ち
不完全だからお前と飲んで

大阪府 堀口欣一
この顔も昭和の生れ黙否権
尼さんのうなじが白い京のバス
土工のアクセサリーの色タオル

大阪府 松岡進
カサコソと落葉小さく秋の音
若者がここにも居ない村祭り
ゲバ棒を斜にかまえる不孝者

和歌山県 阪家和美
散る落葉風音ばかり胸に棲み
真夜中の時計は過去に急ぎおり
ひたすらにひたすらに秋が散りゆく

仙台市 平野光道
ひたすらにひたすらに秋が散りゆく

ライバルの表彰をきくふところ手

日本銀行本店勤めです雑役夫

火焰ピン白黒テレビに白く燃え

竹原市 生

エンピツが折れ母は今ごろ駅だろか

甘えてもすねても女ツメをかみ

わき水の静かさ何もかもしずか

守口市 樋

瀬戸祭中学生の店も有り

其のように教育されたポリス立ち

大和郡山市 中

求めても求めてもなお愛のエゴ

愛の告白焦点なき瞳に縋る

京都府 菊

帰る気の家出は先生をしらせとき

かすがいにされた子供をあやしあい

大阪市 半

病人や言うてもほんまにして呉れず

焼かれずに平等院はもとのまま

羽咋市 三

混った孫の賀状を選びわけ

自己批判とかで大学揺れており

広島市 楨

本堂のほかはガイドの足早い

一張羅もう気にならぬ程に酔い

石川県 同

ボナナスの出る朝玄関まで送り

ああしんどかったと見合の帯を解き

松江市 村

微笑して飛驒のこけしが恋語る

仏彫ったノミで女体を彫り急ぐ

諫早市 原

百点は人目に触れるとこへ張り

渋柿が人目に触れる色で熟れ

富田林市 川

この人はどうしてるやろ古名刺

どうぞどうぞと敬遠の床柱

笠岡市 山

今は早干柿の味わかる年齢

七五三ママの衣裳が先に出来

堺市 羽

案山子三つ田んぼの角で肩を寄せ

俺に付いて来いと云える目を捜す

今治市 渡

心せくままだめくりを忘れてた

なぐさめて呉れず落葉の散り急ぎ

大阪市 小

強がりを言わなくなった背の丸み

うれしさを三拝四拝で受話機置く

和歌山市 増

村 虹 要

松 醉 歩

田 明 春

端 文 一

本 柏 生

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

田 一 扇

どう見ても病後なんかに見えない手
あれこれと雑念つきて昼の風呂

河内長野市

井上喜醉

母性愛夫に巧くつけ込まれ

名所だけ見たら名物素通りし

宿毛市

田美知

女性上位あなた好みをはやらせる

一日のながさをお湯の中で繰り

鳥取市

崎秋女

言いたいこと八分に抑えて娘と対話

燃え切って女五十の殻に生き

河内長野市

森本力松

孫の手を借りて搔きたいとこが出来

手のとどく枝には柿も色づかず

大阪市

田頂留子

ふくざつな女的笑顔今日を生く

笑いたい貧苦の底にある涙

今治市

葛本昌道

毒舌の妻がリードをする平和

ためらえば一対一もあっけなし

鳥取県

大山果風

標本にされるトンボの不仕合せ

親大が野性に返る母性愛

奈良市

桑原千里

通勤の規則正しく駅で覚め

わが児へはかくも厳しい顔があり

兵庫県

高橋近江

逆コース瑞穂農民廻れ！右

物資過剰この猫頭と骨残し

今治市

山国彦

婚約が出来た指輪でペンを持ち

すれすれの線で儲けて叙勲され

今治市

井松花

病んでから母子供ほど手がかり

ランドセル実家に買わす予算にし

愛媛県

榎本満子

ひやかしの客へ売り子の売り上手

文通のいつしか恋を語るペン

大阪市

西本保夫

上役のサクラに平社員狩り出され

云いたい事云うて臨時工やめて行き

札幌市

平野青夜

サービスの鬼商魂を忘れない

石橋を叩きずくめで定年期

岡山県

武元柳子

来るといふ友に柿の実残しとき

散らかった玩具の中で子の昼寝

羽曳野市

麻野幽玄

スト権のない母今朝も米を研ぎ

らしからぬ男が通る赤いシャツ

鳥取県 林 露 杖

細帯は下手でも微笑あるナース
冗談と今更言えぬ破目となり

酷使されゴム紐ぐったり伸びて垂れ
愛憎も年月経てば風化して

大田市 藤 田 軒 太 楼

逃げ道を作ってやったに躊躇する
即決は致し兼ねます妻強し

羽曳野市 飯 田 一 治
うしろ向くことも出来ない二人連れ
親が泣く今日の仏間は有難し

鳥取市 有 田 鹿 の 子

実るだけ実って渋い顔をされ
豊作の柿へ小鳥も食い散らし

広島県 南 条 露 声
大声でどなれば大声で帰り
内職で今日晴天のバスにゆれ

島根県 中 島 英 子

ウェーブが素直にもどる洗い髪
遠慮なく二人を離すベルがなり

貝塚市 行 天 千 代
京都好きせめてお骨を本願寺
子沢山先き嫁く妹残る姉

神戸市 横 山 孜 孝

初詣賽銭倍の願いごと
玄関の下駄が揃わず子は元氣

大阪市 長 田 好 生
美しいこの道二人の歩む道
あの星も二人でとるならとれそうな

熊本市 北 川 一 進

言訳も上手に逃げる二枚舌
メモ帳の隅ヘデイトの日を記入

竹原市 楠 貞 子
秋を皆此処に集めた紅葉谷
国策に背き豊作続くなり

島根県 梶 み どり

宝とも荷物ともなり子が太り
戦中派あなた好みになりがたし

新宮市 大 矢 十 郎
何売りに来たかセールス掃除ほめ
呼出しも耳打ちでくる奥座敷

大阪市 平 井 露 芳

さんまの歌庶民の味に遠くなり
女瘦せ指輪するする逃げたがり

倉敷市 竹 内 翁 童
十代の恋十代でパパになり
亡き母の味がただよう台所

富田林市 木 村 弥 栄 子

泉佐野市 大 工 静 子
四十年叱られ続けて来た笑顔

緻くちゃんになってもおんなコンパクト

竹原市 篠田 浄美

おいしい雲わたしも一緒に流れたい
苦しかった想い出だけの恋終る

高石市 井関 三幸

意地を捨て理性も消して縋りたき
語るにも足らぬ過去でもひっかかり

高知県 山川 勝子

湯豆腐の季節へ土鍋顔を出し
国旗出す役は明治生れなり

仙台市 川村 映輝

過疎の村伝説の松だけ残り
実体が解って月に住む気なし

大阪市 島野 正人

欺むくと知っても女待つ弱味
信号待ち隣の人も足踏みし

伊丹市 春名 青争

ぎりぎりに届けがすんだこどもの名
可笑しさは嫁の方がいける口

大阪市 松岡 茶々坊

急患にナイチンゲールでんてこまい
食欲も色気も消えても死ぬもせず

大阪市 鈴木 生仏

山村に入ってクリスマス静か
信楽の三代狸を焼いて食い

大阪市 木村 渥水

妻留守中小原庄助になりすまし
神仏に勝手な時だけ手を合わし

大阪市 花田 繁子

正直に与えただけの花が咲き
静かな雨花にもよいが雨も洩り

大阪市 今井 隼人

男かと思う女が増えて居り
お隣の職も知らずに住む団地

大阪市 田中 多幸

虫の声聞けば鋤鉋なつかしい
川筋の焚火は釣のひまに寄り

大阪市 吉野 志津

月の塵チリはチリでも人の列
スシ屋さん出前景気の下駄の音

鳥取市 藤本 鎮也

父小康青空ひろし田もひろし
父の部屋いつか病間と呼び慣れる

鳥取県 藤泰 嗣

ちぐはぐな返事が戻る物想い
金借りる為のけんかと知らず止め

京都市 藤本 征山

そう言えば怒るにえくぼ邪魔になり
交通法守り無事故の茶がうまし

藤本 恵子

プレゼント好きな色まで知られてた
言い負けたくやしさに寝てしまい

兵庫県 不二本和久

墓に彫る字まで気にして病臥する
飲めばすぐ寝るのが妻の気に入らず

米子市 藤本勝久

言えぬ事承知で記者はまだ尋ね
花嫁の背丈けに婿の背を案じ

鳥取市 藤本佳女

馴れ過ぎてそれから噂たつ若さ
マイカーのパパだけ禁酒守らされ

鳥取市 河口忠志

かくしごと出来ぬ子供の眼の涙
初雪へ大山紅葉沓え渡り

鳥取市 夏目葉舟

催促の出来ぬ弱みをにぎられる
金網の上でのけぞる干しするめ

鳥取市 米原一稔

賽銭は出さず安全頼んどき
駅前に残る未練がたちつくし

鳥取市 山本珂也女

未練尚つきぬ二人が闇に立ち
駅前に着いたとたんに雨が止み

鳥取市 林すみこ

金網をねずみしばらく噛みまわり

愛するが故に催促言いだせず

平田市 川谷政夫

久々に会った彼女は子供連れ
退院へカルテの厚さ笑い合い

出雲市 高橋幸以知

禁煙の煙ベッドにそっと吹き
仲秋の空よ全治の友は去り

鳥根県 田中泥子

恋しさはあるがふるさと過疎地帯
退院と決った人の笑い顔

鳥根県 石倉晃

歯を磨く窓行商の早い朝
素通りをするほど敷居高くなり

出雲市 安井寿年

バストへの視線を感じての仕種
どの星へ兎行ったかお月さま

新潟県 高野不二

御祝に合せて粗品かえって来
戒名はどれくらい人のように見え

岡山県 目賀芳月

権利主張義務割引の当世っ子
寝屋川市 福富隆子

大阪府 岡本まさひろ

美男でも金持でなし娘むこ

京都市 丹羽英二

斗病のくらしに慣れて癒えちかし

鳥取市 稲

お見合を前に母さん知恵をつけ

岡山県 本

核心に触れたらしい顔ゆがむ

和歌山県 吉

贅沢は内風呂さえも面倒がり

鳥取市 藤

安全デーからかうようなとばしよう

西宮市 加

女だけ生命とどめてひそと生き

名古屋 吉

不似合な英語も入れるお寺はん

大阪市 田

村 光 枝

倉 英 峰

野 富 子

本 和 宏

納 聖 司

田 文 枝

沼 一 登

神無月誰を頼りに拝むやら

大阪市 村 島 秀 村

神に手を合せて祈る家内無事

東大阪市 斎 藤 三 十 四

余る米豊年祝遠慮する

大阪市 大 西 為 二

七人の敵あるという柄でなし

高槻市 山 田 ス ミ 子

アパートにすきま風あり秋深む

出雲市 飯 塚 全 喜 知

マイカーで颯爽と来て事故起し

長野県 中 尾 愛

手をとればたぎる血潮が通い合う

マジックで

11110にゆとり

ある生活を

会費低廉・入会随時

(6カ月速成)

大阪市南区大宝寺仲之町一丁目

誓徳寺内 関西奇術教室

校長 村田瓢太

秀句鑑賞



……前月号から……

清水 白柳

拒否された理由方向違います

福島 鉄児

新春ともなるとタクシーの利用が殖えるのにつれて乗車拒否も多くなってくるだろうと思う。電車やバスは行先が決まっているから反対方向の車へは間違えない限りは乗らない、タクシーはどこへでも走るから乗るので運転手の帰る方向へ行く客でないから乗せないなどとは持つての外だと腹を立てるのは作者だけではない。

帰郷してなるほど若いのに逢わず

大坂 形水

人手不足は年々深刻になってくる、今春卒業の若い人を目標に去年の夏から頼みに行った故郷も仲々思うようにはならなかった。離

職して帰っている若いものでも思っていたがそれも居ない。大都会に近いだけに故郷も人手がなくて困っているのだ。だからと言ってパチンコ屋で遊んでいるような連中は使いのにならない。どこかが狂っているのと同じか思いうる。世の中とは困った世相である。

スピーカー日本語らしいのをがなり

守屋 万竿

街頭で、陸橋の傍で頭の痛い音を立てているスピーカーの雑音を取締る法律がないのだろうか。自分だけにしか判らないような単語の組合せを早口にしゃべっている、ひとりよがりの若者には自分の権利だけを主張することしか知らない哀れささえ感じさせられるのである。共感とか共鳴とかを無視しては何にもならないことを知らなければいけない。と作者は詠んでいるのだと思った。

下手くそのゴルフ按摩の世話になり

草深 醉升

ゴルフと按摩の取合わせに思わずニンマリとした。近代的な健康法としてのゴルフで肩や腰を痛めるようでは、君もまだまだだなと言われて口惜しがって見たものの矢張り痛いものは痛いで早速来てもらったというわけだろう。分相応のことをしておけばよいのにとチヨッピリ皮肉っている。

川柳家必読の「ユーモア辞典」
秋田実主宰・不二田一三夫編集

二月号「漫才」

送料六円
定価百円

発行所 大阪市生野区勝山通六ノ七九

電話大阪(七一八) 三二一八

トイレ建て観光バスを停める策

四方天 弘美

国道沿いに土地の名産品を売る店を開いたものの肝心の観光バスは素通りしてしもうので苦肉の策と考えついたのがトイレを建てることだった。この店がモーテルに発展するの、もうすぐであろう。

唐草の風呂敷持つてると嗤う

谷垣 史好

テレビタレントに唐草模様の服を着ているのがあるが、唐草の風呂敷は明治時代の一つの流行というよりは、風呂敷は唐草模様にきまっていたようである。だからいくらリバイバルブームだと言っても唐草の風呂敷だけは敬遠したくなるのも無理はない、併しそれも大正生れ以前の頭の中だけかも知れないが。

老農の気骨落穂が見すこせず

久家代 仕男

この頃の若いもんは勿体ないと言うことを知らないらしいと老農はつぶやき乍ら落穂拾いに余念が無い。いくら豊作で古米が古古米になろうとそれは政府のおエラ方のなさることで、汗水流したこの一本の穂の幾粒かの実を無駄にすることはお天とう様に済まないというのである。あらゆるものが使い捨て時代になってゆくとは言え、自然の恵みは生かし行かねばならないものである。

心の洗剤今のわたしに見当らず

河野 君子

次々と新しい洗剤が発売されて、一体どれを使ったらいいのか迷う程である。綿に、化センに毛糸にアクリル系に家具にタイルにガラスにと数々あるが、それは皆表面だけを洗い流すものに過ぎない。愛に迷い詩に迷う心に灯をつけてくれるような洗剤は何処を探したらいいのだろうか。それはズバリ、その迷う心が洗剤の役目を果たしてくれているのだということを悟った時に見つかるのである。

飲むときは呼んでもらえる顧問にて

河村 日満

ウルサ型だからと言うわけではないが、とかく相談役とか顧問という肩書は祭りあげられた形になっているもので、年に何回かの総会と懇親会だけには上座にすわって居ればよ

いのだそれで結構役に立っているわけだからチビリチビリと盆をなめて楽しんでいてもらえばいい。

銭湯に一人ではいる豪勢さ

今井 松花

浴室付きの家庭が多くなって銭湯と呼ばれる公衆浴場へ行くことのない小さい子には大きなお風呂が珍らしいものらしい。十年程以前までは銭湯も混み合ったものだが、この頃はどうかだろうか。ともあれあの大きな浴槽に両手をひろげて浸っている気分は何んとも言えないそれが三十二円（大阪市）なのだから有難いことである。

恋人が出来てふめけた娘にも見え

福富 隆子

いままでは底抜けに明るく快活であけすけに何でも話してくれた娘だったのに、最近は何かボンヤリと考えることが多い、声をかけてもチグハグの返事をしたり、ものを見る目がうるんでいる。母親の直感で恋人が出来たのだなということが判る。しっかりとてよ、と力つけてやりたい。自分の若い時のことを思ってみて今の若い娘は幸福だなとも思うその複雑な心理がよく出ていていると思つた。

子のこともめているのに子がとめる

河井 庸 佑

父親と母親の意見の違い、それは子供の教育のことであつたのであろうか、それとも進学校の志望のことだったのか、とにかくわが子の将来に関することなのでどちらも真剣だった。それだけに子供本人にとっても重大なことなのだ。それを本人そのけにもめているのをうまくうがっている。

☆

本号をもってこの欄とお別れすることになりました。社告のとおり二月号は川村好郎氏と西尾榮氏が担当されます。長い間ありがとうございました。

白柳



磨かれた伝統の味

司 子 集 柳
鶴 屋 八 幡

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
売店・各百貨店のれん街

いぬどしだんぎ

東野大八

昭和四十五年は戌(犬)歳がエトである。

元来、私はエトというものは好きではない。嫁とり婿とりには相性がまず引合いに出てくる。ヒツジ女にトラ男は門にも立つな、なんて悪口をいう。私がトラで家内がヒツジなもので、私は私なりにハラに据えかねた経験もある。丙午などに至ってはまさしく人権じゅうりんである。もっともこの丙午は、六十年で一めぐりするので、還暦という。人間六十になると還暦というのはここから出た。ひどい歳まわりにおめでたが食っている点など、おかしい話だ。さるどし、いぬどしはお宮が干上る、なんていうのもひどい迷信である。エトの悪口をかいてもせんなきことなので、世俗に妥協してエトのイヌのことでも書くしよう。

中国では犬といったのは孔子だそうだ。「

犬の字をみれば狗を画くが如し」といった。

犬偏に「句」は、孔子が作字したというのが、犬が句を作るわけではあるまい。「狗は叩なり」「氣をたたいて守る」と説文にある。中国では字画の多いほど賢い犬で、二十四画もある犬偏に幽霊のレイの字のついたのは、最高の良犬だそうである。

日本の犬についてのコトワザや話は、また他の人がそれぞれにお書きになると思うので中国関係だけに私はしぼることにする。

イヌ歳の人には失礼だが、中国ではイヌに關するものにはろくなものがない。「春秋古伝」や「史記」などには「犬牙差互」「犬牙相錯」など国境の争乱によくでてくる。国境線が犬の歯みたくに定かでないのもメゴとが起るという意味で、随分と同質異語がある。「狗蛇蚤をかむ」というのは、犬がノミ

を喰んだつもりでも、ノミはへとも思わない戦果の上らぬ場合の形容だ。「犬馬の勞」とはくだらん骨折りで「犬ていの食」といえば粗食のこと。「豚犬の児」とはつまらぬ子どものことだ。「狗尾統貂」というのは、つまらぬ人間をやたらに高位高官につけること。終戦のころの吉田総理が同じようなことをやったとき、この語が出たのを覚えていた。「桀狗堯に吠ゆ」といえばゴマスリに悦に入る会社重役といった意味になる。「狗猛しければ、酒は酸くしてうれず」というのは、たわけの重役が多くて、人材がよりつかないという意味で、前の例のさかさになる。

有名な言葉には「狡兔死して走狗煮らる」というのがある。漢の高祖の名軍師韓信が、漢の世となって戦乱が鎮まると、ざん言するものがあつて謀反の罪で高祖に捕えられたときに言つた言葉だ。足の速い性悪兎を捕えるためには、足の速い犬が要る。兎が死ねば、その犬にも用はない、煮て食われるのがオチだ、という意だ。昨今の世間にもこの例が多い。

つぎに「鶏鳴狗盜の徒」これは中国の戦国時代、斉に孟嘗君という土豪がいた。居候数千人を抱えた次郎長より大型のやくざの大親分。これが秦の昭王ににらまれ逃亡する際、城門にせかれて脱出できない。ところが子分の中に鶏の啼声や、犬の鳴声のうまいのがい

て、トキを作り、犬がそれに和したので、関守が夜が明けたとカンチがいて門をひらき、まんまと脱出したという話から出たもの。子分数千人もいればつまらんことに役に立つ奴もいるということの好例である。

私の好きな言葉に「犬馬は難く、鬼魅は難し」(韓非子)というのがある。これは、齊王と画家の話で、画を描いて一番むずかしいのは犬や馬で、一番やさしいのがチミモウリヨウ、ユレイのたぐい。なぜそういうことになるのかというと、犬や馬は、世間の人間は誰でも見つけている。だからへたなことをかくとあだこうだと難くせをつけられやすい。ところが、幽霊やお化けはその点、なじみがないので、どう描くにしても画家の方は自由である、そういうったことである。まるで伝統川柳と前衛川柳みたいである。

私の家に犬猫がいるが、猫は大キライである。そのかわり犬はか愛くて仕様がなない。いまの犬は五ひき目だが、三番目の犬は名犬であった。三番目は、私の三十代の末ごろなので訓練も一しおであったためによるらしい。そういえば、四、五ひき目はおそろしくほんくらである。私が歳をとったに比例したのかも知れない。「史記」に「犬の疾からざるに非ず、属する能わざる者の罪なり」に行きあい、私は内心ジクジたる想いにとらわれたことである。

北京の中国人の友人が

「牢獄の二字には、牛と犬がついている。中国人は牛と犬は決して粗末にはしない」と語ったことがある。六朝時代の小説に、人語を解する犬がいて、主人のいつけで、京師から何百里距った郷里へ手紙をことづかり、五十日もたつてフラフラになって戻り、主人の顔を見ると死んだ、という渋谷のハチ公みたいな犬の話が載っている。犬好きは犬が知るで、さきの中国人の友人も、犬二ひきを飼い、実に見事に仕込んでいたのを思い出す。孔子も犬が好きで、飼犬が死んだときは、首を地にふれさせるな、とむしろにくるんで葬つたと「礼記」にある。この人は、破れた帷(とばり)や、破れた蓋(きぬがさ)は捨ててな、牛や馬や犬などの、人間生活にプラスしたものにそれを用いよ、と弟子たちに教えていたとある。私などそんな孔子とくらべ、時には犬飼いの性でないことに思い至る。

さて終りにのぞんで本社編集長の清水白柳さんに頂いた資料を書くことにする。犬どしの川柳人で、白柳さんのお人柄そのまま、まことに詳細丹念に記録されていた。この稿で犬の悪いコトワザなども書いたことで、まことに申訳ないが、それとは全く別ものとお考えのほど敬称を省かせて記させて頂こう。カッコ内は生年、若い順から、句のついているのは、白柳さんの御骨折りによるその若い人

の作品。句のないのは、書いてないので、なしで失礼した。川柳塔同人の多いのは成行きなり。順不同

山田澄枝(昭9) 末っ子が見兼ねたように継ぐ家業

西川けんじ(同) 飼犬の自負はくさりの古

小野田仲江(同) わが不満封じたやかんの湯がたぎる

岡田閑人(同) ベトナムの坊や大きくならないで

豊崎薫(同) お茶入れに立つてことわる語をさがす

難波かおる(同) 人の山なんだろうかと足がむき

古賀心珠(同) ほのぼのときく老人にある丸み

児島与呂志(大11) 麻生アイト(同) 川竹

松風(同) 本庄快哉(同) 山田良行(同)

津秋六花(明43) 浜田久米雄(同) 西村花

村(同) 藤井明朗(同) 石曾根民郎(同) 奥

村丹路(同) 月原宵明(同)

田村藤波(明19) 松尾馬奮(同)

木山遠二(明31) 榎田竹林(同) 中島生々

庵(同) 榎田柳葉女(同) 深野吾水(同) 石

原青竜刀(同) 橋本言也(同)

西野 西辻 西川 西岡 西尾 西尾 西尾 西岡 新岡 二越 永松 永藤 長野 柳楽 中島 中島 永尾 中川 中川 中川 中村 仲筋 内藤 内藤 戸田 友淵 都倉
生竹 誓洛 青一 義一 いわを 回天子 俊爾 道雄 弥平 文庫 鶴丸 生々庵 小石 英断 滋雀 晃男 淳子 ゆきを 三幸 どんたく 幸子 藤さき 藤古 田貴 友山 求芽

長谷沢 長谷川 羽佐間 原野 林野 林野 林野 林野 林野 早川 浜畑 浜野 浜田 浜田 羽原 長谷川 橋本 野呂 野村 野村 野村 野田 野坂 西出 西田 西垣 西森
義紫 柳独 魁昌 夢瑞 葵清 胡蝶 奇童 久米 義一 光治 静歩 三司 緑雨 鷯汀 岬平 味津 素身 柳宏 錦風 花村

古川 舟木 藤原 藤村 藤本 伏見 不二田 藤岡 藤井 藤井 藤井 福間 福田 福田 福田 福島 福井 福井 弘津 平田 平田 平尾 平井 兵井 菱田 久家 馬場 馬場
鶴声 与根 秋月 女山 礎美 茂夫 花梢 朗三 春日 夢路 丁志 多可 鉄児 柳慶 野迷 蘭子 三十郎 実男 太希 井虎 満秋 代仕 魚山 夢生

宮川 宮尾 光好 水粉 満田 三井 満生 間島 丸川 松田 松本 松本 松塚 松下 松川 松岡 榊本 正山 前山 本多 本多 本多 本多 堀江 細呂 古川 古川
珠あい 陽千 銀醉 拜青 初半 忠三 吉太 梁水 杜の 委滄 落児 北海 柳志 惠二 清人 金三 正朗 魯木 魔花 静波

一 灘の味を贈る 一



金露

清酒 キンロ

森本 森田 森下 森川 森井 室谷 山村 村上 村上 村上 三輪 宮口
法布 茗愛 すみ 菁鉄 光瓢 春旭 峰双 笛生
泉堂 人論 むれ 居舟 輪太 巳童 円楽

吉岡 吉岡 吉岡 横山 横倉 行吉 山本 山本 山本 保内 八千
圭美 通一 富久 照立 素阿 静岳 摩天 千代
井房 児声 一 路 児郎 茶水 詩郎

渡辺 渡辺 渡辺 若柳 若本 若本 和海 山田 山田 若林 和田 吉原 吉田
乱独 曉潮 多あ 草季 千太 草右 一乃 紅月 水車
坊歩 童花 志坊 春贊 郎 字

暖房

西垣錦風選

御見合へ暖房少し効き過ぎる
暖房を出た瞬間にハクション
老人の好みも入れて炬燵掘り
暖房のきいた座敷で云いそびれ
暖房がおしめの匂い持て余し
暖房へうとうとチャメラ来も待つ
酒とりとり炬燵の夜が更ける
暖房もなしゲバ棒の中で寝る
暖房のガラスにへのへのもへがも
暖房でゴキブリ春を待つ仕度
税務署のストーブ俺の税でもえ
もう山の校舎にストーブの煙見え
暖房病ホワイトカラーの蒼い顔
三寒も四温も暖房差別せず
暖房へ冬のころ置き忘れ
暖房にさからっているすき間風
暖房も時代時代の色を染め
暖房のよい社長室は秘書一人
暖房を出れば世間の冷えに立つ
壁一重隣りは暖房置いてはり
暖房を効かした部屋の冷蔵庫

暖房に溶けた黙否権が泣き
電話局機械室から暖房し
暖房費取つて豆炭三つ呉れ
暖房の月賦スイスイ取りに来る
暖房をよいことにして梅笑う
暖房の輪へ残業の冷たい手
暖房へ人間不信の顔が寄り
ストーブを離れ窓辺は恋であり
暖房へ猫も手を出し足のぼす
暖房の部屋に一輪春つくる
木枯らしヘデパートの空気へ走り
暖房のビルで藪蚊が生き残り
民宿の炬はたふるさと偲ぶ夜
一と列車送つて暖とる踏切番
暖炉赤々と燃え紅葉闇に消ゆ
乗り越しの駅の暖炉の火の小さし
造花あり暖房あり自然遠ざかる
家よりも心に欲しい暖房具
暖房の機上の窓に凍てる月

暖房もつけず鍵つ子母を待つ
炭の火のほのぼの母の温かさ
かるた
池田あや子選
かるた会の思い出妻の名調子
知られず見合となつたかるた会
かるた会ということにとデイト
ちちははにロマンスがかるた会
敵方に愛人がいるかるた会
歌がるたよりゴーゴーのお正月
猪口置といはるがたへ引き出
かるた会ガムをかむ娘の膝がしら
エンゲージリングもまじかるた会
かるた会今もハントの場所となり
さりげもかるた取手と手をかさね
かるた取り母は娘の日に返り
和服もミニに歩があるかるた取り
あなどつたかるた子供に牛耳られ
かるた会去年の女は見あたらず
良い父になる元旦のかるたと
歌かるた祖母は明治のよさを言い
三カ日受験忘れてかるたと

警 察 犬

不二田一三夫選

思い出が山ほどあつたかると取り
名人のかるた天井へ舞い上り
おばあちゃんのをを見直す百人首
老眼鏡すり落ちそうに読むかるた
すこしどもるのがかかるた読みたる
恋人を待つトランプにかける夢
女の子に負けてかるたは止めに
うちあける機会を狙うかるた会
かるた会ふと貫一のこと想う
恋人もおこらずチャンスかるた取
万葉のころかるたの春が明け
思慕しきりかるたを繰り耳朶の声
花がたるた何にもかけず庶民の灯
這そ来た赤子に手をやくかるたも
佳
百人一首そろそろ意味がわかり
百人一首昔の恋の美しさ
かるた取り引きかかれそう赤い爪
お手つきの罰へ一曲歌わされ
取れぬのを紅一点のせいにする
人
小康の父をかこんで取るかるた
地
読み直さう間にかるたさらわれる
天
その意味も訳も知らずにかるた取り
軸
雲上の恋おらかなかるたとり

警察犬刑事と同じ目で見据え
完全犯罪と思う愚を嗅ぐ警察犬
警察犬出てそこいらが不穏なり
山狩りの脚はがゆがる警察犬
功労章邪魔そうに提げ警察犬
渚まで警察犬が知つていた
チリ一つ警察犬の勘にふれ
犬好きが嵩じて警察犬を飼ひ
人間を連れて警察犬散歩
警察犬きようはゲストに出るテレビ
警察犬出番がこない平和郷
警察犬のように妻嗅ぎつける
自由な恋がしたい警察犬
警察犬調教師一人食べさせる
雨後の舗道警察犬の泣きどころ
オイコラと云いそう警察犬が行く
犯罪をめくる警察犬の鼻
警察犬助けるように風が吹き
追いつめて警察犬は刑事待ち
本能を利用して警察犬
警察犬迷宮入りをほぜりだし

警察犬コンピュータに指令され
ひるむ気を警察犬にはげまれ
サーカスの真似もさされる警察犬
ホシの知恵警察犬に勝てなんだ
警察犬所詮鎖の先きにあり
三四で文珠の知恵が警察犬
こそ泥は相手不足の警察犬
警察犬兎そばづえ受けて出る
残飯を警察犬は見逃さず
表彰状残して犬は殉職し
佳
朝霧へ警察犬の目が揃ひ
警察犬刑事の癖をよく覚え
警察犬柔と剛とを使い分け
アリバイを警察犬がきて崩し
警察犬ある日は蛙とたわむれる
人
嗅覚の通りに地図を走り抜け
地
天網の破れ押さえた警察犬
天
ワンタツチOK警察犬の鼻
若本多久志著

「老いの坂」
「親ごころ子心」

520円
265円

初歩教室

——題「神」——

本田恵二朗

明けましてお目出度う。今年も教室の皆さん仲良く手を継ぎおうて、川柳街道を、楽しく歩き続けよう。さて新春のおこたの中で、ぬくぬくとして、皆さんのご熱吟と楽しく対話をするにしよう。

キリストで暮れ神さまで年が明け 光道
クリスマスそれから初詣と、楽しい年末年始
を持てる者は倅せである。そうなりたいよ。
神さまの手不足事故を防ぎかね 近江
一カ年に万を越える死者を出す交通戦争のいた
ましさに、もう神さまに頼ってはいられぬ。

やれ右派だ左派だと神をあきさせ 孚彦
人間という動物は扱いにくいと神がこぼす。
つまみ食い神さんそつち向いていて 止水
こんなのはまだ可愛いらしい。神さんをけと
ばしといて、つまみ食う奴がいるよ。

玉砂利を踏む時邪心消えていた 肖二

神域の清く爽しいムードは、邪心を洗ってくれる。人間の善性を甦えらせてくれる。

信仰をタシに選挙で勝つつもり 富子

皮肉のメスで、ぐさりと刺したよ。美事だ。

神代から女性上位というお国 静観堂

なるほど天の岩戸に閉じこもって、手こずら
せたのは女神だったな。むべなるかな。

十円玉賽銭箱へストラライク 風仙洞

まさか投手のモーションよろしく投げたわけ
でもあるまいが、ストラライクとはうれしい。

ぬかりなく儲けてござる赤鳥居 多幸

拝む側も、拝まれる側も共に商魂たくましい

欲ばけの頼みへ神さんそつぽ向き 茶々坊

そんなのもう聞きあきたよと神さん大欠伸。

気まぐれな神におたのおろけかしれぬぞ

などと謙遜なされたがおのろけかしれぬぞ

神ならぬ身の失敗を繰り返し 美代

だからといってそうそう繰り返えされては。

もう離婚したかと出雲さんあきれ 軒太楼

出雲さんの方がミスを棚に上げてござるよ。

出雲さんに忘れられたかまだ嫁けず 弥栄子

出雲さん曰く、わしは忙し過ぎるよ。

お守の加護信じよう信じよう 保夫

交通戦争の犠牲が多過ぎる。お守がよく売れ

る。奇妙な世相とはなったものだ。

神棚の神枯らさぬのも家風 静子

伝来の良き家風、それは美しく尊いものだよ

岐阜市 島川柳会

会長 市川 鱈

副会長 井川 清

同 高瀬 恵子

会 計 市川 芳博

本年もよろしく願います

賽銭の音で神さま目を覚し 為二

紙幣の音なら目が覚めるから不思議である。

初詣ここは晴着の見せどころ 繁子

それを觀賞しに行く奴がいる。だからしゃなり

りしゃなりと歩かねばならなくなる。

妻に肩貸す参道にもみじ敷く 露杖

いたわり合う枯れた味の愛情に、もみじをあ

しらって、好ましい絵となった。

柏手を打つてへそくりたしかめる 富士

神さまにへそくりの番をさせている。番が居

眠りなどしてはと時々打つかしわ手だよ。

宮司さんの腕で神さん浮き沈み 生仏

何ごともPR時代である。宮司も人間だよ。

初詣去年と同じでと祈り 綾女

神さんは忘れつばいから、去年ので祈ったつ

て、今年のだと思うにちがいないよ。

ミニの膝ちよつと氣にしてご神前 進

氣にするこたない。神さん目を細めてるよ。

神様も医者も信じて今日も生き 雅万

両方を信じるることこそ斗病の原則だ。

商才がまんまと戎さんまるめこみ 弘生

戎さんに特級酒でも飲ませたな。それとも、

神さまのいたずらうれしいめぐり逢い

千代

こないたずらなら大歓迎であらう。

ご神助を信じるほどに不倖 孜孝

薬が神に見えたり、電柱が鳥居に見えたり。

貧乏神とうまが合うほどなまけ者 勝子

なまけ者もこうなると貫録があるな。

八百万神に出雲さん羨まれ 利美

酒の神などは妬けてたまらぬ顔してるよ。

神主の声はればれと結び上げ 初甫

大安吉日これで五組目だ。やれ疲れたよ。

昼寝までして山の神よく肥り 一二三

快食快眠快便は健康のもとだよ。

結局は頼みがない神でした 露声

お賽銭が足りなかったのだらうかとも思い。

おみくじは引いたが拝むのを忘れ 満津子

さてはその恋大吉と出たにちがいない。

万策のはてに見つけた神頼み 一登

絆袴を脱いで巫女さんミニで去に

返事してくれない神のたよりなき 新之助

産声を無事に聞きたい神頼み

神前の誓いを家裁でほごにする 秀村

とそきげん孫に曳かれて初詣

神棚のへそくりくすねる亭主飼 賛平

神官の拍手年期の音訝える 政夫

比呂路

ピンチいま過ぎて神様忘れられ
陶器神社皿の人形で人を呼び
近頃は地震雷山の神

戒さんに裏から内緒で頼んどき

おみくじを神のみ声と信じよう

死神が医者顔見てUターン

獄窓からキリスト様がしのび込み

出雲さんどう間違えたか僕と妻

元旦だけ荒神さまを思い出し

朝参りする下駄の緒がブツリ切れ

屋上の鳥居前で愛誓い

荒れる海みつめて神をよび続け

七五三氏神さんに見てもらい

鬼神さえゲバの心理計りかね

※

楽しい句、うれしい句、微笑ましい句、ご年

配のくせに若々しい句、そんな句を読んだ味

の良さを私は求める。明朗な句やユーモラス

な句が、少なくなる傾向を嘆く声をよく聞く

昨今であるが、嘆く前に、どしどしとそんな

句を生み出して欲しい。笑顔もお色気も無い

真面目そのものの句を生み出すための思索の

重要さは言うまでもないことで、私もその意

態と努力を長年続けているが、それ一辺倒で

は、私の脳味噌は疲れたるに決っているの

で、潤滑油を求めろのだ。その潤滑油は、私

の人生行路の潤滑油でもある。

今回の題は「神」であったが、中々楽しい

句が多くさんあったことを喜んでゐる。新春

大吉

志津

渚水

三十四

八郎

虎城

和風

慶彦

三幸

光枝

万竿

義一

誓二

克枝

句が多くさんあったことを喜んでゐる。新春

にふさわしい微笑みがただよっている。

われわれ川柳人の心は巾広く、太らかで、

温いものでありたい。硬軟両面を持ちあわせ

まだ動と静の両面を持ちあわせ、常に明朗で

ありたい。そんな環境からは、屹度佳句が生

れてくると信じよう。さあ昭和四十五年の当

教室の第一歩を、力強く踏み出そう。

一月二十日メ切「早」三月号発表

岡山県倉敷市下津井三五二

郵便番号七一一

本田恵二朗宛

色紙短冊
書画用品

大坂成びしや

丹 青 堂

を申せし、せし

第二百二十二回(四十四年度最終回)

大 萬 川 柳

「斜め」

入選発表

選者 清水 白柳
 投句総数 五百五十六句
 入選 六十七句
 恋終る不安そつと斜線ひく 富田林 東雲楼
 八尾 鬼遊
 すぐに要る金へ銀行渡り捺す 島根 正朗
 小言聞く顔は斜めにむいたきり 高槻 静馬
 ロープウェイ斜めと見上げ歩かぬ子 和歌山 政夫
 氣付かれぬように斜めにさす日傘 豊中 古方
 広重の橋は斜めに雨が降る 大阪 あいき
 泣いた顔車窓の雨にのぞかれる 堺 一舟
 団体で祈禱斜めに拝まれ 大阪 誓二
 斜め斜めとこ機嫌の千鳥足 羽曳野 いわを
 割切れぬ話斜めに向きをかえ 藤山 可住
 さりげなく老妓斜めに居てくれる 富田林 美代
 ごろ寝して柱の斜め見る空虚 米子 千代

みくじ箱斜めに振つて運を見る 羽曳野 友恵
 補助椅子も斜め会場うめつくし 富田林 東雲楼
 おしやべりが過るこ機嫌な水 和歌山 葵永
 はすかに眺めて着付け出来あがり 熊本 芳仙
 斜めから撮ればまんざらでもない私 倉敷 克枝
 傘の無いおんなひとりに斜め雨 西宮 百酒
 斜めから見るからことがもつれ 大阪 水客
 糸切れた琴立てかけたままにあり 尼崎 慶彦
 常識が首を斜めにする世相 笠岡 要次
 隙間風斜めに泌みくる夜業 岡山 久米雄
 はすかに坐り冷たいことを云う 羽曳野 友恵

斜めから出て来た人に席とられ 大阪 文子
 逢いたさがつのり公園はすに抜け 大阪 風仙洞
 ななめから見送るだけの純な恋 倉敷 扇水
 斜めには自信逆光線を選ぶ 大阪 小路
 ラツシユアワー斜めと吐き出さる 大阪 雅万
 ご機嫌が斜めで話またにする 倉敷 春日
 斜めからすかし眺めつ買うでなし 鳥取 忠志
 膳本へ嫁した斜線が一つ増え 鳥取 恵子
 答案に斜線が走るかなしさよ 豊岡 和久
 浮気した朝を斜めににらまれる 小松 芳朗
 靴ななめに減らすとこま父に似て 倉敷 一二三
 傘ななめにさして男ばかり濡れ 下関 不水
 斜線グラフセールスの背のしかち 横顔はいやと斜めにとるポーズ 大阪 比呂路
 おしやべりを構えがはすに 愛情の傾斜女が利巧すぎ 大阪 比呂路
 割り箸の斜めに割れし日の不満

人名簿だんだん斜線増えてきた 鳥取 日満
 腹立ちへ雨も斜めに降る今宵 倉敷 素身郎
 はすかに僕だけの道バスが見え 倉敷 石好郎
 もう一度斜めから撮る初舞台 倉敷 素身郎
 衆目を知つて斜めを見る女 倉敷 素身郎
 陽は斜め二人立とうとしなない 倉敷 素身郎
 奥さんが斜めのわけを猫は知り 倉敷 素身郎
 目を立てて斜めに這うた蟹の恋 倉敷 素身郎
 境内を斜めに抜けた無信心 倉敷 素身郎
 指しやぶり視線斜めに母を追ひ 米子 瑞枝
 帯じめも斜め色香がまだ残り 岐阜 鱗魚
 防犯灯斜めに照らす灯を信じ 堺 天笑
 作業帽はすにかぶつて息を入れ 転げそうなかがし雀の目と出合い 電話ベル鍋蓋はすに走り 松原 史好
 生意気におもちは斜めにも動き 目も耳も斜めかと思うほどひがみ 煙草屋はおひま斜めに店番し 倉敷 恵二朗
 音速に袈裟切りされた秋の天 写真班斜め斜めにつきまとい ライバルの視線斜めに意識する 佳句

少年の肩が斜めに抗議する	米子 千代	十二	中谷 利美	一五、五	尼崎
2DK斜めに寝かす友が来る	倉敷 里風	十三	藤井一二三	一五、五	堺
はすかに寄つてゐる方が惚れて	高石 好郎	十四	野田素身郎	一四、五	倉敷
一本の斜線で戸籍から抜かれ	倉敷 扇水	十五	傍島 静馬	一四、五	高松
立ち退けはもうはすかに道が	大阪 柳志	十六	金井 文秋	一四、五	高松
人ノ句	大阪 柳志	十七	本田恵二朗	一三、〇	倉敷
改札を斜めに通る旅みやげ	尼崎 利美	十八	谷垣 史好	一三、〇	倉敷
地ノ句	高槻 静馬	十九	小幡 里風	一二、五	倉敷
利腕をよけて斜めに聞く小言	天ノ句	二〇	青山慶之助	一二、五	大阪
歴史おもしろ斜線のなかに和紙を	大阪 水客	二一	山川 阿茶	一〇、五	大阪
木枯へ斜めになつて皮袍	選者 吟	二二	米沢 暁明	一〇、五	大阪
☆ 昭和四十四年度	ベストテン	二三	高杉 鬼遊	一〇、五	尾道
決定		二四	井島十四雄	一〇、五	倉敷
本多 柳志	二二、五	大阪	浜田久米雄	一〇、〇	岡山
川村 好郎	二二、〇	高松			
正本 水客	二一、〇	大阪			
河内 天笑	二〇、五	堺			
林 瑞枝	二〇、〇	米子			
小野 克枝	一九、〇	倉敷			
里 小路	一七、五	大阪			
市川 鱈魚	一六、五	岐阜			
八木 千代	一六、五	岐阜			
藤岡 花梢	一六、〇	富田			
十一 菊沢小松園	一六、〇	大阪			

梅里賞	本多 柳志氏	敢斗賞	中谷 利美氏	藤井一二三氏	終始健斗せられたが僅かに〇・五	点の差にてベストテンに進出が出来ず、新進作家としてその努力を表彰する。	残念賞	菊沢小松園氏	第三回	「モデル」	五句以内	締切 二月二十日	投句先	大阪府高石市高師浜三丁目五十六番五九二	郵便番号	五九二	川村 好郎
昭和四十五年第二回	「国旗」	五句以内	締切 一月二十日														

第 17 回 大 萬 川 柳 大 会

日 時 昭和45年 2月22日 (日)
12時半

会 場 割烹 大 萬 (故松江梅里宅)
大阪市阿倍野区松崎町 3 丁目

会 費 二百円 (大会句集費を含む)
司 会 西尾 榮
開会の辞 若本多久志
柳 話 中島生々庵
挨拶 川村 好郎
昭和四十四年度ベストテン表彰

★新年度第二回「国旗」入選発表

兼題 「大志」 清水 白柳

「好客」 本多 柳志選

「珍客」 川村 好郎選

「微笑」 正本 水客選

「枝」 河内 天笑選

「克己」 林 瑞枝選

「小錢」 小野 克枝選

席題 三題 (当日発表) 里 小路選

選者 市川鱈魚 八木千代 藤岡花梢

。兼席題三句以内の事 菊沢小松園

閉会の辞

ベストテンご招待懇親会

註 投句のみの方は百円封入 (句集代を含む)

各題別々に柳箋または便箋に記載の上

二月二十日までに好郎宛送って下さい。

(選者の方で当日出席不可能の方は早目

にご通知下さい)

主 催 大 萬 川 柳 会
後 援 割烹 大 萬 柳 塔 柳 会

★柳界展望

橋高薫風担当

写真は川端重雄・柳子夫妻



▼川上三太郎忌句会は十二月二十一日(日)午後一時から東京都四谷若葉町西念寺で開催。

▼服部十九平追悼川柳大会は十九年柳樹出版記念句会は十二月十四日(日)正午から岡山市下石井岡山県遺族会館で開催。句集はB6版百六頁、故人の四百句が録されている。定価五百円。本社から生々庵主幹、好郎副理事長、白柳編集長らが出席、故人を偲んだ。

▼白百合川柳会主催、第四回岡山県川柳大会は昭和四十五年一月十八日(日)午前九時半から邑久町公民館ホールで開催、兼題は花・女性・素顔・マインホーム、各題三句、投句は百円同封の上、岡山県邑久郡邑久町真徳、嘉数千代香宛、一月十五日まで。

▼第一回仙台市民川柳大会は十一月二十三日(日)午後一時から仙台市元柳町仙台市公会堂で開催。
▼米子映月追悼句会は十一月十五日、第三回川柳作品展は十一月五日から十一日まで今治市民会館で六〇点を展示、好評を得た。
▼備前川柳社十一月句会は十五日浄美居で。
▼電報岡山川柳会十一月句会は十九日岡山電報局で開催。

▼王紫川柳塔賞受賞祝賀句会は十一月二十三日(日)午前十時一時から出雲市駅前旅館たいへいで開催。
▼阿部佐保蘭一周忌句会は十一月二十五日(火)午後六時から東京都中野区若宮のかはる吟社で開催。
▼豊岡川柳天守閣四周年記念句会は十一月十六日(日)

瀬戸町公民館で開催。羽原静歩氏が出席された。「飄々と時雨の山の彩が冴え」静歩。

▼鈴木可香氏作句生活五十年記念川柳大会は十一月十六日(日)正午から名古屋三友健康会館で開催。
▼川柳「うずまき」十一月号は潮路出版記念特集号として発行。

▼久米南町偉人伝発行記念第一回南町偉人祭は十月二十六日午前十時から久米南中学校体育館で開催、川柳相撲という題で作句をされた。
▼川柳オホーツク十一月号は通巻二百号を迎え川柳句集「凍原」作品を募集している。作品自選十句を住所本名、雅号(ふりがな)、生年月日、所属、職業を原稿用紙に並記の上、昭和四十五年四月三十日まで北海道北見局区内私書箱八二二号句集「凍原」係宛、参加費六百円。

▼昭和四十三年度北海道川柳年賞は、札幌の葛西末明氏が、「銃口を向けて平和を口にする」その他の句で受賞、北海道川柳連盟賞は札幌の高田房乃、紋別の米谷初冬子両氏が受賞され

た。
▼川村好郎副理事長、高杉鬼遊氏(大阪府同人)、宮西弥生さんは十一月二十七日皆生温泉へ。八木千代さん林瑞枝さんが歓迎された。

▼尼緑之助氏(参事)は会社の移転、労組対策、夫人中風で病臥、令息の結婚式と文字通り忙殺されているが、島根県芸術文化祭川柳部門の選衡を柴田午朗氏、坂本昇雲氏らと担当、十一月十九日の受賞式には代表で出席された。

▼河村日満氏(鳥取同人)は会社の合理化案で忙しい上に夫人の里の農繁期の手伝いに転手舞をされている由。
▼岡岡雪眼子氏(諫早市同人)は熊沢照元氏(後醍醐天皇二十二代裔)の媒酌をされたので新聞や週刊誌の記者の訪問責めに会い躍り有名になったと、「週刊誌書かれる人気が持ち合わせ」岡村久志良氏(参事)から、「私の庭の黄菊白菊の匂いを小包で送りたい程です。もう炬燵で大相撲を見たいです」と。「もの云わぬ隣へ菊が崩れ咲き」工藤甲吉氏(弘前同人)から、「今日は里でも粉雪

が初めて見られました。ここの一月四人の孫が次々入院、すっかりくたびれました。十月二十六日八戸で米浪進之助氏と会いました」▼垂井葵水氏は七面十一月例会で清水白柳選兼題で、「帯解いて駅長室で出たキップ」

▼玉造川柳会 一月十日六時
▼特別宿題・妻・信用金庫
▼大阪川柳会 二十日六時
▼題・あけの・挨拶・風変わり・占い・以和貴荘
▼南海川柳会 二十二日六時
▼題・橋上駅・出発・晴着親和クラブ

▼酒田清子さん(大阪市同人)は昨年度の路郎賞準特選の賞状、カップをデントと枕元に飾って療養のひとつとを得意顔に過しておられる。調子が良いが寒さに向う時なので退院をのぼすつもりだとのこと。
▼村田瓢太氏(大阪府同人)の主宰する関西奇術教室では、第二回奇術発表会を十二月七日(日)午後一時から東成区民ホールで開催された。

▼東野大八氏の令嬢愛子さ

んが十一月二日お嫁さんになり、ツノ隠しに打かけ姿のけんらんたるいでたちで挨拶をされた時は感慨一しおだったと。

▼三井酔夢さん(香川同人)は膈膜剝離手術の令息のうな状態である由。

新同人紹介

小野 克枝
好郎・三林坊・薫風推薦

森井 菁居

時 広 一路
白柳・静水推薦

行 吉 照路
久米雄・一声推薦

加 藤 河 産

兵 井 虎 声
好郎・酔々推薦

王 緑之助・白柳推薦 紫



▼八木摩太郎氏(参事)と宮地双楽氏(同人)は十月二十八日、二十九日、滋賀県信楽町多羅尾浄願寺での信楽町出身英霊法要、十一月二十七日には箕面市英霊追悼式に、それぞれ講演の堺市金蓮寺住職井上文成師に随行、師の講演の後、「川柳と社会」、「和の精神」と題してお話をされた。十一月十九日には徳子夫人と空路鹿児島旅行へ。

▼八木摩太郎編著の「堺の川柳散歩、堺詩藻集」出版記念会が十一月二十三日午後七時から堺駅前南海グリーで開催、川村好郎、清水白柳両氏はじめ、富田林から藤岡花梢さん岩田美代さんらが出席お祝いされた。

▼田垣方大氏(倉敷同人)はその後退院されたが自宅療養をされている。

▼伊藤茶仏氏(参事)の藍綬褒章受章祝賀句会が十一月十六日開かれ盛會、同人では千太郎、芳朗、弘美氏

が出席。

▼川柳供養(川柳募集)題父・葉香郎選・母・夢の虹選・子・恵二朗選。締切一月十五日。投句先、倉敷市児島下の町十丁目八・五宮本海人

▼川端重雄・柳子(岡山市同人)銀婚記念後楽園川柳句会報「しろがね」が発行された。「何かも有難かったと振り返り柳子」生々庵主幹の祝辞祝吟がある。「燻し銀二十五年のお人柄生々庵」なお柳子さんは十二月十日来社され中島生々庵夫妻、葉子、薫風と快談された。

▼水谷竹莊氏は心臟病のため通信病院に入院されたり

のバス旅行。中島診療院から一三夫、豊平次、葉子さんが参加。



黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3451-14
夜間 06 4408

・近 詠・

高 鷲 亜 鈍

きのうもきょうもおそらくあすもくらからう
沈黙の友へなんとか声してよ

(白黒記出版記念)

吊しあげられてうれしい声ばかり
往く杖を守ってくれてる避けてくれてる
目よりも高くセントポールに黒いペナント
合掌のくぼみへ点滅する螢
絶対の黒い世界も透きとおり

須 坂 市 高 峰 柳 児

デートもうおおびら遠路へ歩をのばし
背を向けた故郷の寄付帳軽く受け
秋祭り出稼ぎ村たつ日が決り

和 歌 山 市 秋 月 宏 方

華 嚴 の 滝

流しぶき空気の味も称えたり

中 禪 寺 湖

ささ波もたてず迎えてくれた湖

大 洲 市 米 沢 曉 明

青空の高さの色で秋の雲

雀にはかかわりのない余剰米
点にして人を立たせた大鳥居
商略に乗った和服の七五三

今 治 市 月 原 宵 明

文楽の眉毛を付けて見たい顔
父と子の酒 だあまって据酌ぎし
算盤もろくにおけぬに財を成し
冬柳待人の来ぬ影となり
胸襟を開いて校歌から軍歌

今 治 市 長 野 文 庫

七転び八転びの末左遷され
ホステスの謀略金を貸してくれ
気の毒なお顔まっ赤に髪を染め
出過ぎたが二度と戻らぬしほり出し
尻馬に乗って天井どこを買い

小 松 市 山 上 千 太 郎

役得に狎れてもらったものけなし
寝ころんでいても雑音息ぐるし
団体を抜け文化財に独り佇つ

名 古 屋 市 長 谷 川 鮮 山

格式を今に守って鯨幕
世に誇るビル借金でこも建て
両方で辞書を見合って校正部

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック

積 水 化 学

本社 大阪市北区宗屋町1

み



★生々庵主幹消息 11月7日大
阪府内科小児科医会長として常
任理事会のリクレーションに屋
島一泊旅行に出席。11月13日か
ら小石夫人と共に鎌倉から東京
へ三泊旅行。鎌倉では建長寺に
井上剣花坊の句碑拝観。11月22
日から小石夫人と大阪大学医学
部同期卒業生総会に出席のため
伊勢内外宮参拝の後、鳥羽国際
ホテルに一泊。伊勢スカイライ
ンの絶景に驚かれた。

本社十二月句会

会場 以和貴荘

六日 午後六時

解散師走とは無関係だろうが六十名を割ってしまつた。せんばの宣介主幹から欠席おわびというおたよりをいただき感激しました。

多久志副理事長の柳話は「ヨーロッパ」である。太陽が北へ回わる国や、失業者の一人もない国など、またはニューヨークの街を歩いていて金髪的美女より黒人に会うほうが多いとか——市民の六割が黒人というアメリカだそうで、耳にたのしいお話。

本年最後の月間賞は、好漢河内天笑氏が手中におさめられた。

(河井庸佑整理)

出席—いさむ・与呂志・文秋・誓二・維久子・一二三・古方・生長・万の・柳宏子・大吉・滋雀・新之助・柳志・一舟・作二郎・葛城・形水・義人・双楽・鶴声・花梢・一三夫・トメ子・儀一・白柳・肖二・綾女・季賛・千万子・生々庵・茂美・瓢太・天笑・夢成・禎三・圭井堂・静馬・つき子・摩太郎・弥生・多久志・河産・富久一・虎声・静歩・酔々・鬼遊・良子・あいき・庸佑・好郎・凡九郎・葉子。

席題「乗車拒否」 墨作二郎選

乗車拒否 ところで寝たると酔らば
乗車拒否 否された同士で飲み直し
乗車拒否 否されたら雨が上りかけ
回送という手でサッと走り抜け
同郷の訛で乗車拒否をされ
入庫をしますそんな手で逃げる
乗車拒否 しませんと窓に嬉しい字
乗車拒否 おもしろい顔になつて来る
人相をじっくり見られ乗車拒否
乗車拒否 雨の音まで腹が立ち
乗車拒否 しませんキレイな女性なり
乗車拒否 してたしかめて見るノルマ
子供づれの客で乗車拒否も折れ
タクシーに振られて酔も醒めていき
子供連れ邪魔くさかったのか乗せず
じろりつと見て町寧に乗車拒否
乗車拒否 ばかりされてるところに住み
乗車拒否 雨にうたれていた詩人
三度目の拒否へ奴鳴った国訛り
乗車拒否 されて子連れの重い足
乗車拒否 理由に朝まで飲みあかし
乗車拒否 枯野へドア開けに行く
乗車拒否 枯野へドア開けに行く

席題「拾い物」 越智禎三選

紙屑屋見付けた古書が万で売れ
拾い物 忘れられた頃に呼び出され
良い拾い物 だったとは妻のこと
通勤時 硬貨は拾う人もなし
拾い物 して雨の夜を歩かされ

拾い物 心の奥ものぞかれる
参道で拾うた五円で拝んとき
拾い物 だけれども知らないから困り
拾い物 もんや言うて家出をこき使い
拾ったコンパクトに女の顔が写った
拾い物 女名前前へとどける気
拾い物 した帰路を追う月が冴え
拾い物 物と思つた息子が赤軍派
やっぱり拾いものやつたなとわかり
拾いもの 鍵にかなしみ乾かせる
拾い物 知らず靴が押えた十円貨
拾うた金に誘惑された日の失意
中味見てがっかりさせた拾い物
拾い物 届け客疑者ほど聞かれ
拾いもの 風船捨てに行く枯野
拾われた兎に暖かな心の灯
札拾う手に他人の瞳が突きささり
物かげでゆっくり開ける拾い物
たんまには拾うてもこいと叱られる
街路樹にたのんでかえる拾い物
拾いもの 仔犬の欠伸ついて来る
菓子拾うたところをワン公湿しとき
ハンケチを拾う余韻のある夜景

席題「出口」 阿万万の選

入口と出口のちがう連れ込み屋
むくむく地下へ人が湧くように
掛軸の裏に出口のある旧家
出口開け映画の終わりをせきたてる
いんぎんに出口まで送り金貸さず

裏の出口開け方をきいている幹事
マーケット出口で籠を提げて待ち
デパートの商魂出口にもたくましい
景品は出口でくれる開店日
出口まで来てから自信くずれかけ
出口で苦勞さまで投票所
わははと出口で笑うお化け小屋
出口まで呼ばれ飲み屋のツケが持ち
勝敗の顔を見分けている出口
鍵束の音が出口へ消えて行く
地下街の出口でくしゃみ派手にやり
事故あつた当座出口を皆たずね
デパートの出口デートの顔並ぶ
大劇場出て深呼吸する疲れ
出入口一つへ焼香の長い列
会議室出口で意見又わかれ
もう夜になった出口へ押し出され
遊園地こんなところにある出口
出口もう塗らぬ女の眉帰る
閉会の辞すむまで出口しめておき
出口でも同じチラシを握られ
出口までホステス商売用の顔

兼題「スパイ」

神谷凡九郎選

スパイ居る耳うちファイト押えとく
社を勝たせスパイ弧独な宴の果て
スパイも氣ぢよとだけ洩らして来
小枯の立場スパイを意識する
二重スパイといふおつてまごつかせ
孫の目を忘れておつた内証ごと
ババ危険可愛いスパイついている

一二三
鶴声
季賛
積三
柳志
野二
警迷路
滋雀
いさむ
作二郎
天笑
一舟
弥生
綾女
柳宏子
柳志
白柳
庸佑
作二郎
静馬
花梢
万的

兼題「銀行」

菊田いさむ選

あの人がスパイやなんてそうやるか
日々是好スパイに縁のない暮し
スパイ賃こども何んば貰うたき謀り
金策の銀行でスパイの眼が出合い
へそくりを可愛いスパイ見付けだし
スパイらしく見せて内心ほくそ笑み
スパイとも見られ味方とも見られ
欠陥車と知らずスパイ図面ねらつて
スパイ戦テレビで見てる平和な夜
スパイ戦わが社は枠からはみ出され
スパイの眼へ歯がゆく對抗株あがる
スパイの目に相手を目感じてる日々
馴れ馴れしい話しどっちもスパイ
きらりと光る眼鏡スパイかも知れず
企業競争時にはスパイの眼にもなり
チヨコレート一つで小さなスパイ
ある夜ふとスパイほんと愛ほしく
それとなく妻の様子を聞く別居
捕まったスパイの胸に子の写真
とても素適なスパイの赤いブーツ
ママの秘密パパに言うてもスパイ
魂がこんなるに軽い札になり
スパイされるる人生ドラマ今日も

柳宏子
酔々
静馬
万的
万的
花梢
花産
河産
醉々
虎声
万的
与志
古方
夢成
柳宏子
花梢
富久一
滋雀
多志
久志
あいき
鬼遊
凡九郎

定期だけ粗品を呉れる窓邊し
兎に角預金もそれほど余裕もない賞与
銀行のきびしさ税務署さえあきれ
不渡りへ銀行の電話事務的に
銀行は両替だけで顔なじみ
団地出来る田へもう銀行の立看板
紙幣数う手が金権を意識せず
紛飾の決算銀行まで小企業
銀行の手加減当てに大企業
札束を数え経済学無用
銀行も替えて商売出直す気
銀行も得意先ありゴルフ会
銀行の街さながらのターミナル
除夜の鐘聞いて銀行まだ残業
税務署と銀行で泣き言使い分け
銀行の通帳底にある市場かご
ボリーナスの行方に銀行低姿勢
表情かたくして師走の銀行を出る
銀行に縁なき師走の風真正面
一円が合わず行員まだ残業
手形でず利息ですきつちり銀行屋
新設の銀行サービス過剰気味
ギフトチェックだけのお客も師走
くたぶれて紙幣が帰ってくる銀行
銀行を背に八卦見の指定席
銀行の帳尻で里が泣きつかれ
裏住居銀行の供花で見直され
不渡り銀行他人になつていた
銀行にてこ入れされて越す師走
ささやかなボリーナス銀行の目が光り
銀行から重役が来て立ち直り

白柳
万的
生々庵
柳宏子
花梢
どんたく
積三
文秋
与志
醉々
天笑
形水
肖二
綾女
河産
茂美
トメ子
弥生
弥生
つき子
生々庵
綾女
茂美
つき子
千乃子
生々庵
大吉利
夢成
滋雀
虎声
柳志

銀行が架空名義の知恵を貸し 多志
勸銀へ附添いの要る当り籤 金三
銀行が挨拶に来た応接間 多志
ご入金なら銀行横を明け 凡九郎
日銀の格式改装もせず古び 金三
断腸の思い銀行に見はなされ いさむ

兼題「話術」

戸田 古方選

口から先に生まれよつと齒がたたず 日満
素人の手品話術で種がめられ 止水
朴訥の話術絵物語りがばい 止水
ホステスの話術だけではついて来ず 一栄
口べたに見せるセールストップづく 正朗
この顔でナンバーワンになる話術 新之助
パーセント割出す話術手厳しい トメ子
話術より唾の手真似に責められる 扇水
耳に手をやって話術に引き込まれ 虎城
造花めく話術を顔で聞いておき どんたく
風紋の話術昨日を恋うるひと 埴三
くちなしへいつか話術にたけて妻 萬成
よくとちる話術で女将如才なく 天笑
話術より大阪弁でよく稼ぎ 文秋
控え目の話術で司会喜ばれ 夢成
豊かなる話術に妻と腕をくむ 千子
むだ話何時の間にやら結論へ 良子
最後まで聞かせる話術を心得て 扇水
氣に触ることは聞かないのも話術 作二郎
そっくりの話術煙草の輪をぬける 白柳
応援の話術が票につながらず 摩太郎
猛烈おやじへ笑わす腕を持ち 花梢
下手くそな話術握手でごまかされ

正直に話せば氣持汲んで呉れ 肖二
大阪弁で笑わすせわしない話術 萬成
話術など要らない冬の道歩く 作二郎
ゆつくりと話のむきをかえてくる 虎城
話術より話引き出す聞き上手 文秋
真実には勝てぬと知った日の話術 文秋
話し方心得ていて聴き上手 形水
話術かえようノート書きなおそ 古方

兼題「逃げ場」

清水 白柳選

昔なら頭を刺ればすむ逃げ場 止水
おやこんなどこにもあった逃げ場 八郎
部課長の逃げ場わからぬ大掃除 日満
もう逃げ場ないヘルメット時計台 正朗
逃げ場ない線で夫は拳上げ どんたく
お二階が嫁の逃げ場となる同居 綾女
能面をとれば逃げ場のない男 埴三
真剣な瞳冗談とも言えず あいき
宴会の逃げ場を先にみつけない つき子
良心の苛責に逃げ場見失い 葛城
上手に逃げた暴落を振り返る 警二
月末の逃げ場未の映画みる 失名
俺は俺逃げ場探さんことにする 凡九郎
追求のわざと逃げ場をあけておき 柳宏子
インタビューストレス秘書のメモへ逃げ 柳志
逃げ場のない2DKに不意の客 生々庵
母の膝逃げ場に未っ子兄にじゃれ あいき
選挙事務長逃げ場はちゃんと作っ 一二三
答弁に逃げ場朱線を引いて立ち 富久一
腹据えてかかれ逃げ場もあった異 滋雀
妻の勘恋の逃げ場をはじ出し 花梢

季節料理・折 詰

大 萬

阿倍野区松崎町
TEL 03 5031・5032
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL 03 9184

低気圧夫の逃げ場も考えず 生
いやな人来たが逃げ場のない廊下 千万子
逃げ場からたまに甲羅を干しに出る 古方
逃げ場所としてのお城で日向ぼこ 失名
ママさんの逃げ場はうらのお茶漬屋 野迷路
逃げ場だと思っていたは落とし穴 河産
訓練のように逃げ場は聞いていず 柳宏子
親猫の逃げ場テレビの上に寝る 茂美
吠えられた恐さを母の胸へ逃げる 柳志
野次馬の余裕逃げ場を確かめる 扇水
逃げ場まで決めたに男気が変わり 一二三
逃避行香港にして恋に生き 一三夫
生きてゆく限りをドヤの灯に和み 鬼遊
集金の又かた逃げ場無い居職 富久一
逃げ場のない静かな敵意もてあます 作二郎
男一匹反旗は逃げ場こしらえず 夢成
眼を逃けた視線に矢張り敵が居る 柳笑

を地柳壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

川柳たましま

水粉千翁報

骨肉を断つのではない鞭を振る 八笑人
封建のまださめやらぬ萩の道 三林坊
鍵つ子の或る日ボタンを引きち切り 秀子
矢印の通りに歩く妻として 千枝
ふるさとのとりことなつて祭酒 千翁
琴の音に虫の音さえ遠ざかり 梁水
ある不安むさばるように辞書を繰る 澄子
お祭を待たされていゝ庭の菊 柳子
確答も与えず萩の花に向き 麗水
白羽の矢射とめて可愛い孫が出来 綾子
鉤指す指に私が消えてゆく 鼓草
後進に道を譲ってなお憂い 扇水
肉親の顔が揃って出る意見 三幸堂
相槌の上手むさばるように聞き 萬平
激情をむさばる愛の交叉点 里風
どんぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報

この家の重みか釘箱ずつしりと重し 史好
釘の出た靴は荷物の番をする 鬼遊
古釘を日曜大工伸しただけ 敏雄
夏の陽を受けて大工の釘光り 水陵

新婚は釘一本も相談し
押しつけた貸傘空は晴れ上り
空模様氣にせず地下で儲けとり
釘を打つ日曜大工が囲み
金鍵と火花散らしてすねる釘
日曜大工釘と金鍵妥協せず
釘打ったつもりがかるくあしられ
茄子漬けへ古釘二度の役果し
とんとんと打診ベニヤへ釘の打ち所
釘の音聞けば家主が首を出し
釘拾い棟梁現場に無言なり
釘一本打つに家中さわがれる
口に釘ふくんで大工せわしない
鉄筋に住んで釘打つのに困り
戸締りは釘さしただけ身の軽さ
錆び釘を叩き抜くこつ教えられ
実印を手渡す妻に釘さされ
先住の釘穴やつぱり棚をつり
空模様どつちでもええ無一文
空までも汚し経済伸び止まず
空を飛ぶニース世界をせまくる
ガス栓の不始末教育まわのるす
釘無しと聞いて国宝又見上げ
歩道橋の上から都会星を見る
昼休み大工が釘で耳を搔く
どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎報

子の日焼け笑う夕餉の生ビール 河股
栄冠を逃し悔なき日やけ顔 小川
仲人は日やけのせいにしてまめ 吐木
病床へそよ風母の代りする 青木
台風よ来るな妻子の居る故郷 桂馬

醉々 吐来 生長 万竿 比呂 秋峯 真砂 奈々 孝子 双葉 修史 痴亭 幽玄 儀一 之保 雄峯 静波 喜風 虎生 弥生 好郎 小松 白柳

迷信を叫んで悩み

持ち続け

(布堂)

交通安全お守

一体に付
二百四十共

紅地 巾 一寸二分
金襴 丈 四寸
ビニール袋入

鳥取県東伯郡赤碕町中村

長伝寺

涼風に誘われ家路遠くなり
復職をあせる気持を風ほぐし
待ちばうけ風の音でも耳を立て
寒風が屋台ののれん開けてくれ
日やけた子にうばわれる旅話題
日やけた背広で稼ぐセイルスマン
病臥して日やけた頃なつかしむ
日焼けした顔に苦勞のしわの跡
日焼けして血汐たざらす甲子園
日焼けしたわが子頼もし母の顔
カナツチが一番黒い日焼けなり
アルバイト流れる汗も黒ずんで
見舞われた友の日焼けに腹が立ち

夢女 加藤 一治 醉々 豆行 圭坊 いさむ 元房 九鬼 有路 加藤 大塚

女心日やけをかくす厚化粧
 生地なのに日焼けで通す夏となり
 地の黒き冬まで日やけのせいにす
 日やけしてしばしの涼と畦で乳
 陸橋へ来て運よく風が吹き
 気休めがほんとのことに触れてくる
 日やけだけ一人前というゴルフ
 好いわを
 好郎

まるべに川柳会 (大阪市) 川村好郎報

別れ話無心に密柑食べてる子
 お上手はよせと不機嫌な今日
 試食品味までわかる量でなし
 あの頃の無茶が中風になつて覚め
 サンマさえ庶民の口から遠ざかり
 無理矢理に試食さされて買われる
 試食ではおいしかったが新製品
 お上手に乗って上座へ坐らされ
 もう呉れる頃か隣の柿の色
 お隣の柿の色づきはめておき
 扇風機ねぎらうように拭いて秋
 好星青泉一幸瓢素節ゆきを
 郎斗香睦世子子太郎

川柳ウイロー社

怒らせて焦らせて思う壺にはめ
 子の土足猫と一緒に怒られる
 表情に出せぬ怒りが身にこたえ
 師の影を踏まずどころか怒鳴りつけ
 化粧室夫を待たすことに慣れ
 どん底の家計へ用のない鏡
 智性美がほのかに彼女のうす化粧
 化粧品女の心理をよく掴み
 厚化粧どうでも二号見返す気
 ハイティン試しに母の化粧品
 蒼蛇様
 浮草
 魔花麗
 坪山
 埃水
 泉女
 カロ女

こまつ柳壇 (小松市) 山上千太郎報

平和とはこんなに忘れものの山
 給食のパンの残りも出るカバン
 唇を出るまで罪のないものを
 借金を忘れる酒の付がふえ
 スリの眼が光っているとは知らぬ
 すぐ唇をとがらす癖も反抗期
 集合の時間も忘れて買う土産
 靴から弁当だけの平社員
 言うことに唇も目も尖つて
 女系家族あるじひっそり忘れられ
 靴持ち政治の裏へ立ち廻り
 腹立てたはずみに置いたもの忘れ
 二泊三日海外へ行く程に詰め
 指切りを忘れてよその嫁となり
 忘れたい事に他人は触れたがり
 おとこ女忘れることのむずかしさ
 千太郎
 茶仏
 芳朗
 松水
 城南
 吉枝
 東風
 一進
 富美子
 柳弘
 義弘
 香徑
 信子
 みさ子
 たつ路
 平と路
 泰子
 勇次

和歌山短詩型文学クラブ 中筋三幸報

河内川柳会

高飯浜島野河榎兵加香
 杉田田野坂内本井藤川
 鬼一儀大つき天吐虎河醉
 遊治一吉子笑来声産々

針山を仕舞う振りして泣いており
 家庭科の縫い目やっぱり男の子
 針供養するほど女縫いもせず
 閑先に壁と対話の秋となり
 鍛冶に削がれしいもの白さかな
 冷たい目恋人だから気にかかり
 恋人のくせそのままだ出た葉書
 針二本折ってやもめの釘付け
 四十の恋本物になりはじめ
 恋人がいなけりや甲斐性なしにされ
 宣次三幸
 子章

電話ベル思わず針を襟にとめ
針ささり血を吸う妻の指かたく
深更に針持つ妻の妊み居る
我が娘恋人にして町を行く
壁掛へ意見対立夫と妻
いらだちが受話器を通る壁がある
壁に影月の出てるをたしかめる
てる代

南海電鉄川柳会

(大阪市) 辻 圭水報

免許証まだほやほやで運転し
運転の合間お庭の掃除もし
A・T・S人間不信という姿
初運転ときいて同乗断られ
スムーズな運転富士もよく晴れ
運転手の話好きにも困りはて
マイカーを持って町医のよくはやり
宏 圭 水 子

大阪通信病院川柳会

森下愛論報

ゲバ棒のベンを忘れてもう久し
ゲバ棒を捨てて教練やり給え
ゲバ棒と凶器となって市街戦
地図開き二人たのしく旅を練る
本人は癌とは知らず死んで行き
癌ですかアハハハに患者はつと
野次馬の動きが恐い釜ヶ崎
幼稚園もう野次馬が育つてい
川柳むらくも(島根県) 藤井明朗報
ほろよいで帰さぬと言ふ目がからみ
顔見ない電話できつう叱られる
大安へ仲人はずむ電話口
帰省して語る旧性のあたたかさ
帰省しておふくろの味かみしめる
帰省して方言丸出し気兼ねせず
惣 一

・ペンペン草・

★EXPO70年の
新春、おめでとうござ
います。本年もよろしくご指導のほど
をお願い申しあげま
す。

★この稿を書いてい
るこの日に、まだ十
二月号不着のハガキ
が舞いこみ、今から
新年号に頭が痛い。
★社告にあるように
次号から首脳陣がフ
ルに執筆されること
になった。「秀句鑑
賞」へ雑詠選者が毎
月、交代で総登場と
いうわけ。ご期待く
ださい。

★清水白柳氏が「九
輪抄」を担当される
が、どなたでも出句
できる。ただし厳選
らしく、全ボツ者が
多数出る模様。

★これらは十二月四
日の理事会で決定さ
れたものである。
★番傘の後記へ聡夢

へ 路 州 紀 おどる 黒潮



▶白浜・新宮ゆき◀<なんば発時刻>

急行きのくに2号…(毎日)……7時45分発
急行きのくに6号…(毎日)……12時51分発
急行きのくに10号…(毎日)……16時40分発
夜行直通列車…(毎日)……22時15分発

▶白浜ゆき◀<なんば発時刻>

急行きのくに52号…(土曜)……13時13分発
●きのくに6号は座席指定席券を 他の列
車は着席券をなんば駅でそれぞれ1週間前
から発売します

お問い合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038

南海電車

柿たわわ生家ゆたかに帰省待ち
帰省した子に父の愛母の愛
白月

テレビ局世のおこ釘つにオーモレーツ
大坂形水報

初訪問名刺変りの包み出し
丸山

この恋に言わせてみたや猛烈と
林

名刺だけ部長と書きたい年になり
鉄

猛烈に押ししてまた押す恋の道
酒

もてるシャッター押すまでも知
井

カメラにはある日の夢が写って
智

名刺みて思い出す顔出さぬ顔
真

あきないも名刺のいらぬほどになり
美

ホステスの出した名刺を趣味にする
露

特売に家計をかける女房族
青

猛烈な夢も育つか新入社
東

猛烈に生きて女らしさを失わず
勝

子の姿見せるがためのカメラ買
宮

新婚のシャッター押して一人旅
内

猛烈断絶義理人情は遠くなり
西

猛烈も正月までの頑張りさ
一

初孫は泣いた笑った写される
扇

ふみ殺しけ散らし直る企業戦
健

ほろ酔にカメラ向けると肩をくみ
常

モレーツにもマイホームになりき
神

裏口を通る名刺を持って居り
夢

カメラマンモデルの裸意識せず
田

モレーツの連続飽きのきたCM
坊

白入形木千神常健有一西亜宮内青東美真智酒鉄丸山

柳仙水石夢田夢坊一扇岡成内谷勝露人也井鮑林山

白入形木千神常健有一西亜宮内青東美真智酒鉄丸山

柳仙水石夢田夢坊一扇岡成内谷勝露人也井鮑林山

柳仙水石夢田夢坊一扇岡成内谷勝露人也井鮑林山

柳仙水石夢田夢坊一扇岡成内谷勝露人也井鮑林山

柳仙水石夢田夢坊一扇岡成内谷勝露人也井鮑林山

氏が、川柳塔発表の
句から「75」、と

「787」をとりあ

げーこれでよいもの

であるうか、おそろ

しいことである。ー

ーと書いておられる

★よそのことはほっ

ときなさいーとい

う人と、もっともだ

という人が、川柳塔

にもおられるかも知

れない。

★元日から仕事をす

るのは毎年おなじだ

が、川柳は二月号、

漫才は三月号の編集

で、どうもカンが狂

いがちである。ラジ

オの仕事も二月用の

とこと、三月用の局

があつてマゴつくと

が多い。ときどき

今月は何月だったか

ナ？とカレンダーを

見ることがある。こ

の調子では長生きが

できそうです。

★年賀広告へご協力

お礼申しあげます。

(不二田一三夫)

(不二田一三夫)

(不二田一三夫)

(不二田一三夫)

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎

国際観光旅館

うおまたろ
魚又楼

TEL和歌山(44)0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4



風光明媚な
海岸美を
誇る

社 告

▼二月号の「秀句鑑賞」の同人吟は、川村好郎氏。近作柳樽は西尾榮氏が担当。

▼三月号は同人吟を若本多久志氏。近作柳樽は菊沢小松園氏が、それぞれ執筆されることになりました。

▼四月号以降、四氏が交代で同人吟と近作柳樽の「秀句鑑賞」を入れ替え執筆します。

▼清水白柳氏は新設の雑詠選者として「九輪抄」を担当。これには同人、一般を問わず投句できます。奮ってご応募ください。

川 柳 塔 社

三 月 号 発 表 (1月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

— 自選は四句以内 —

集 近作柳樽 (10句) 菊沢 小松園 選

九輪抄 (3句) 清水 白柳 選

課題吟 (各題5句以内)

「パ」 ン 山川 阿茶 選

「叱」 る 桜川 不水 選

「土曜日」 小西 無鬼 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

四 月 号 発 表 (2月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

— 自選は四句以内 —

集 近作柳樽 (10句) 北川 春学 選

九輪抄 (3句) 清水 白柳 選

課題吟 (各題5句以内)

「ゴル」 フ 浅野 芳朗 選

「長」 男 太田 良子 選

「失」 敗 臼井 三林 坊 選

★川柳塔の投句は本社同人に限りません。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

本社新春句会

日時 一月八日 (木) 午後六時
会場 以和貴荘 (いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

★短冊交換会 (一人三点以内)
★四十四年度月間賞杯授与と全出席者表彰
兼題 柳 話
「ベ」 ル
「餅」 ル
「再」 会
「花」

席題 二題 (題と選者は当日発表) 各題三句
会費 二百円
★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

2月の兼題 「妥協」 「デザイン」
「押入れ」 「指切り」

定価 百八十円 (送料六円)

半年分 千 百 円 (送料共
一年分 二千百六十円 (送料負担)

昭和四十四年十二月二十五日印刷
昭和四十五年一月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼 中島 蓬太 郎

発行人 大陽印刷株式会社

印刷所 郵便番号 五四二

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川 柳 塔 社

電話大阪・二七一三三八五番
振替口座 大阪・三三三八番

5 mg
25 mg
50 mg

全身倦怠・肩こり・腰痛
関節痛・食欲不振・便秘
胃腸機能の減退・疲れ目

ハイベストン

活性ビタミン複合剤

疲労
神経痛は
すぐ
おとり下さい

高峰秀子



セドリック
ローレル
ブルバード

乗用車専門販売店

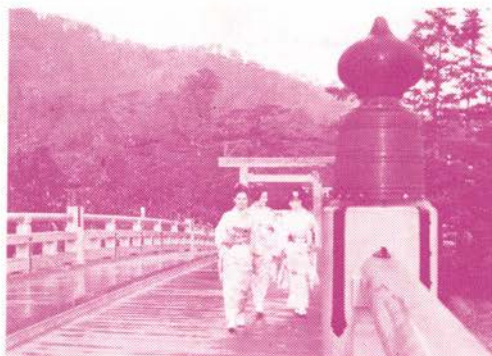
尼崎日産自動車株式会社

代表取締役 若 本 真 彦

本社	尼崎市尾浜下ノ川434	電話(481)5681代
神戸営業所	神戸市長田区二番町4丁目2の1	〃 (56) 6725代
姫路営業所	姫路市市川橋通1丁目13	〃 (24) 6145代
宝塚営業所	宝塚市川面字南言田8番地	〃 (87) 2626~7
篠山営業所	兵庫県多紀郡篠山町郡家田中の坪842の1	〃 (2) 0603
明石営業所	明石市船上祝町2の1の10	〃 (913) 0234
西宮営業所	西宮市下大市東町11番地	〃 (51) 7681
加古川営業所	加古川市米田町船頭591	〃 (2) 5526
三田営業所	三田市字新土1610の1	〃 07956 5933

初詣はお伊勢さんへ

速くて便利な近鉄特急がご案内します



お伊勢さん初詣は
近鉄特急がいちば
ん速くて快適です
玉砂利をふみしめ
おい茂る杉木立を
ぬい 神前に手を
合わせる このす
がすがしさが新年
の幸せを呼びます
ちよっと足をのば
せば 二見浦・鳥
羽湾への初旅も楽
しめます

伊勢市・宇治山田駅へ：大阪上本町から1時間53分
座席指定特急券とも片道750円 近鉄京都から
2時間23分 特急券とも 片道870円
◆初詣のご相談・近鉄特急券のお求めは 近畿日本
ツーリスト・日本交通公社・日本旅行の各営業所へ

近鉄



一番よい酒

うまい酒



清酒

菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影